

ファウスト雑感 I ~ IV

Notizen über "Faust" I ~ IV

漆 谷 克 秀

Katsuhide Urushidani

I. 「ヘレナ悲劇」 Notizen über “Faust”1 —‘Die Helena-Trägödie’—

はじめに

ここで対象とする『ファウスト』は、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) の作品である。

わたしは、二十歳過ぎに初めてなにかの世界文学全集でこの作品を読んだようには思うのだが、当時のわたしは、さほど知識もなく、時間的にも空間的にもそのモチーフの広大さに圧倒されていたのであろう。特に、2部のよく判らない展開に、最後まで読むことに苦労したように、記憶している。ただ、ヨーロッパ文学の概要を、この作品を読むことで、一応の理解を得られるのではないかという印象を持った。

沖縄国際大学の赴任して、「ドイツ語」以外の授業で、学生たちにもっとも多く語ったのが、ゲーテのこの作品『ファウスト』であったかもしれない。全文を通して原書で二度読み、部分的にはいろいろな箇所をどれだけ読んだかわからない。日本訳も、鷗外のものから、いくつ読んだであろうか。読むごとに新たな想念が浮かんだり、また、研究書などを読んでいて、日本人にはすぐに感取することのできないような新しい問題について覚醒されたりもした。

それで、印象に残っている場面を思いつくままに書きとめていきたい。テキストに使うのは、“GOETHES WERKE. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, Bd. 3, 9.Aufl., 1972”である。() 内の数字は作品の行とページを表記している。また、引用文中の……は省略を示す。

1. 「ヘレナ悲劇」

この作品で、わたしが最も好きな場面は、第2部第3幕の後半「陰をつくる森」(Schattiger Hain) の、いわゆる「ヘレナ悲劇」とか「美の悲劇」とか呼ばれる最後の場面である。第2部の第3幕は、この作品のクライマックスのひとつとってよいであろう。戦闘場面はないが、ファウストは、ゲルマン民族の軍勢をもってメネラス (Menelas) のギリシャ軍を打ち破り、ヘレナを助けたのである。「生きる」意味を見出したファウストは、ギリシャの理想郷「アルカディア」でヘレナと暮らし、二人の間には、オイフォリオン (Euphorion) という子供がいる。

「アルカディア」についてファウストの長い独白があるが、人々の暮らしを示した最後の部分を引用する。

Hier ist das Wohlbehagen erblich,
Die Wange heitert wie der Mund,
Ein jeder ist an seinem Platz unsterblich :
Sie sind zufrieden und gesund.

Und so entwickelt sich am reinen Tage

Zu Vaterkraft das holde Kind.
Wir staunen drob ; noch immer bleibt die Frage :
Ob's Götter, ob es Menschen sind ?

So war Apoll den Hirten zugestaltet,
Daß ihm der schönsten einer glich ;
Denn wo Natur im reinen Kreise waltet,
Ergreifen alle Welten sich. (9550-61, S. 288)

ここには、ゆったりとした生活がうけつがれている。
頬も口も晴れやかだ。
ひとり一人が、それぞれの場所で不死である。
誰もが満ち足りて、健やかだ。

そのように、清らかな日に、かわいい子供が
力強い父親へと育っていく。
私たちは驚いてしまう、まだなおも疑問が残っているのを、
それらは神々なのか、人間なのか、と。

そうアポロは羊飼いに姿を変えていた。
もっとも美しい羊飼いはアポロにそっくりだった。
というのも、自然が支配しているその純粋な圏内では
すべての世界が手を取り合っているから。

すべての世界が互いに手を取り合っている。この地では、神々も人々も、大人も子供も、それぞれの場所で、安寧な満ち足りた快い生活をしている。「不死」(unsterblich)とは、このような生活が次の子供たちに受け継がれていくことなのであろう。人間なのか神々なのか区別もできず、あらゆる生命界が共存し、自然の圏内で照応し合って生きているのである。また、ヘレナに象徴されるギリシャの「古典古代」の「美」とファウストに象徴される「中世騎士」の「ゲルマンの精神」(ミンネ)が融合し、ファウストから約束の言葉が発せられる瞬間が訪れた予感がする、そのような雰囲気さえも醸し出されているのである。1972年ミュンヘンオリンピックの記録映画のモットーとなり、矢沢永吉が歌った化粧品メーカーのコマーシャルソングの歌詞にもなっている言葉である。

オイフォリオンには、多くの要件がシンボライズされている。それについて述べることをここではしない。オイフォリオンの形象は、ギリシャ独立戦争に参加し、若くして客死したイギリスの詩人バイロン (George Gordon Byron) と、父親の注意を忘れ、人工の翼で太陽

に近づきロウが溶けて海に墜落して死んでしまった若者イカロス (Ikaros) から借りている。

そして、「若い」ということの特徴は、「親の言うことを聞かない」ということなのだろうか。「若さ」は「跳ぶ」(springen)で表現されている。オイフォリオンは「より高く跳ぶ」ことを求めていく。より高く跳び、地上に戻ってくるたびに、より大きく生長しているのである。

北欧の悪魔メフィストフェレス (Mephistopheles) は、南欧ギリシャにおいて、そのままの姿では肩身が狭いのであろうか、ギリシャの醜悪な怪物フォルキアス (Phorkyas) に仮装している。その口を借りて親の子供に対して抱く心配を述べる。

Nackt, ein Genius ohne Flügel, faunenartig ohne Tierheit,
Springt er auf den festen Boden : doch der Boden gegenwirkend
Schnellt er zu der luft'gen Höhe, und im zweiten, dritten Sprunge
Rührt er an das Hochgewölb.

Ängstlich ruft die Mutter : Springe wiederholt und nach Belieben,
Aber hüte dich, zu fliegen, freier Flug ist dir versagt.
Und so mahnt der treue Vater : In der Erde liegt die Schnellkraft,
Die dich aufwärts treibt : berühre mit der Zehe nur den Boden,
Wie der Erdensohn Antäus bist du alsbald gestärkt.

(9603-11, S.290)

裸の、翼のない守護神が、獣めいたものもない森の精ファウヌスのように、
固い地面の上に跳び下りる：だが、地面は反動で
その子を空高く跳ばした、そして二度目の跳躍、三度目の跳躍と、
その子は高い丸天井に触れてしまう。

心配して母親が叫ぶ：何度でも好きなように跳びなさい、
でも、飛ぶのはいけません、自由に飛ぶことなどしてはなりません。
そして父親も諫める：大地には、お前を上空に押し上げる、
弾力があるのだ；爪先で大地にしっかりと触れていることだ、
大地の息子アンタイオスのようにお前はたちまち強くなる。

繰り返し跳躍することは構わないのだが、その度に、しっかりと大地に足をつけることを、
親は子に求めているのである。しかし、もう、オイフォリオンは、跳ぶと天井に触れてしま
う。家は、この子供にとって小さい。オイフォリオンのとって「自由」とは、この家を飛び
出すことである。この三人の様態がどのように変化していくのか、引用を臆せず列挙して
いく。まず、三人が和するように、それぞれ各自によって、幸せな様子が語られる。

EUPHORION. Hört ihr Kindeslieder singen,
Gleich ist's euer eignere Scherz ;

Seht ihr mich im Takte springen,
Hüpft euch elterlich das Herz.
HELENA. Liebe, menschlich zu beglücken,
Nähert sie ein edles Zwei,
Doch zu göttlichem Entzücken
Bildet sie ein köstlich Drei.
FAUST. Alles ist sodann gefunden :
Ich bin dein, und du bist mein ;
Und so stehen wir verbunden,
Dürft'es doch nicht anders sein ! (9695-706, S. 293)

オイフォリオン. 子供が歌うのを聴くと、
すぐそれは 親自身のの楽しみになります。
ぼくが調子を合わせて跳ぶと
親の心も跳ねます

ヘレナ. 愛は、人間として幸せになること
それは 高貴な二人を近づけ、
神々しい歓喜へと
大切な三人の一組を作ります。

ファウスト. それからすべてのことに気づくのだ。
わたしはおまえのもの、そして おまえはわたしのもの。
こうしてわたしたちは 結びあっている、
これが変わることはないように！

オイフォリオンは、最初、なんとか親の言うこと聞いて、我慢している。親の言うことを聞いてしばらくは、合唱の者たちと輪舞を舞うのだが、飽き足らず、突如走り出す。そして、次のように続いていく。

EUPHORION. Nur durch die Haine !
Zu Stock und Steine !
Das leicht Errungene,
Das widert mir,
Nur das Erzwungene
Ergetzt mich schier.

HELENA UND FAUST.
Welch ein Mutwill' ! welch ein Rasen !

Keine Mäßigung ist zu hoffen.
Klingt es doch wie Hörnerblasen
Über Tal und Wälder dröhnend ;
Welch ein Unfug! welch Geschrei! (9779-89, S. 295)

オイフォリオン. 森を通り抜け！
ただ、がむしゃらに！
たやすく獲得したもの
それはぼくを、むかつかせる。
力づくで手に入れたものだけが、
ぼくを喜ばせる。

ヘレナとファウスト.
なんとこの気まぐれ！ なんとこの凶暴さ！
慎むことなど 望むすべもない。
谷や森中にどよめかす
角笛のように響いてくる；
なんと乱暴なことか！ なんとこの叫びか！

自己の「力」(Kraft) と「意志」(Willen) を知らしめるために、いやがる「少女」(Mädchen) をつかまえ、意のままにしようとする。そして、逃げていく「少女」に導かれるように、オイフォリオンはより高く上っていくのである。平和な国で優美に過ごすことを訴える「合唱」に、オイフォリオンが答えながら、続いていく。

EUPHORION. Träumt ihr den Friedenstag?
Träume, wer träumem mag.
Krieg! ist das Losungswort.
Sieg! und so klingt es fort.

CHOR. Wer im Frieden
Wünschet sich Krieg zurück,
Der ist geschieden
Vom Hoffnungsglück.

EUPHORION. Welche dies Land gebar
Aus Gefahr in Gefahr,
Frei, unbegrenzten Muts,
Verschwendrisch eignen Bluts,
Den nicht zu dämpfenden

Heiligen Sinn —
Alle den Kämpfenden
Bring' es Gewinn! (9835-50, S. 297)

オイフォリオン. おまえたち、平和な日々を夢めているのか？
夢を、夢をみたい者はみればよい。
戦争！こそ 合言葉だ。
勝利！それが響き続く。

合唱 平和な世に、
戦争に戻りたいと願う者、
その者は、希望のある幸福から
分かたれています。

オイフォリオン. この国が 危険から危険の中へと
生みおとした者たち、
自由で 限りなく大胆な者たち、
惜しげもなく自らの血を流す者たち、
抑えられえない
神聖な精神を持つ者たち—
すべての戦う者たちに
なにか得るものがあるように！

「アルカディア」で受け継がれていた安寧な快い生活は破綻してしまう。オイフォリオンは、高みへと上りつめ、武装し死を決して戦いの只中へと赴くのである。「アルカディア」で営まれ、受け継がれていた安寧な快い生活は破綻してしまう。ファウストたちの「思いあがりだ、危険だ、/死ぬことになる」(Übermut und Gefahr, / Tödliches Los!) (9895-6, S. 298) という叫びにも耳を貸すことはなく、飛翔し始める。

EUPHORION. Doch! — und ein Flügelpaar
Faltet sich los!
Dorthinn! Ich muß! ich muß!
Gönnt mir den Flug! (9896-9900, S. 298)

オイフォリオン. でも、もう双翼が
拡がっていく！
あそこへ！ 行かねば！ 行かねば！
飛ぶことを お認めください！

オイフォリオンは、空へと身を投げ出し、頂から輝きを発して、光の尾を引いて飛んでいく。「イカロスだ、イカロスだ」(Ikaros! Ikaros!) (9901, S. 298) と合唱が声を上げるなか、この若者は両親の足元に墜落する。

HELENA UND FAUST. Der Freude folgt sogleich
Grimmigtes Pein.

EUPHORIONS STIMME aus der Tiefe.

Laß mich im düstern Reich,
Mutter, mich nicht allein! Pause (9903-6, S. 299)

ヘレナとファウスト。 喜びの後すぐに
つらい苦しい悲しみがついてくる。

オイフォリオンの声 (地底深くから)。

ぼくを この陰鬱な国に、
お母さん、ぼくを一人にしないで! (休憩)

ヘレナとファウストの言辞は何を意味するのであろう。なんとなくわたしたちも肯いてしまふ。迷妄の中で生きている人間の「人智」なのか。喜びばかりが続くものではない。また、オイフォリオンの死は、ギリシャ自由独立戦争の悲惨の極致を示すものとも考えられる。

そして、オイフォリオンの「お母さん」という呼びかけである。どうして「お母さん」なのだ、というのがわたしの怒りにも似た第一の感受である。子供を大切に、常に気にかけているのは、ヘレナもファウストも同じであろう。それなのに、子供ができると「お父さん」はだめなのだ、とつくづく思ってしまう。父親とは悲しい存在、これは、おそらくゲーテ自身の生活からの実感であろう。

同時代の近親の人々や後世の文学者たちから愚妻だとののしられた (もちろん好意的なものもあるが) ゲーテの妻クリスティアーネ (Christiane von Goethe, geb. Vilpius) は、アウエルシュテットの会戦で勝利したナポレオンの軍隊が、ワイマールに侵入し、ゲーテの家に押し入って、略奪、狼藉を働こうとしたとき、前面に向き合って、追い払ったという肝っ玉母さんである。ゲーテは様子を窺いながら隠れていたそうである。この数日後に、ゲーテはクリスティアーネと正式の結婚式を挙げ、18年間の内縁関係を解消し、正妻として迎え入れた。子供たちにも信頼されていたのであろう。「母さん」というこのようなちょっとした呼びかけにも、生活を感じさせるのである。

『クリスティアーネとゲーテ、詩人と生きた女性の記録』(ジークリット・ダム、西山力也訳、法政大学出版局、叢書・ユニベルシタス 954、2011年、東京) から、平民の出自であるクリスティアーネに対する中傷と悪意に満ちた言動を同時代の人々や後世の文学者たちの言葉から引用しよう。トーマス・マンは (Thomas Mann) 「美しい肉の塊、おそろしく無教

養」と、ロマン・ロラン (Romain Rolland) は「知的水準、最低の女」という。ローベルト・ムージルは長編『特性のない男』に「およそ品のない名前」を持つ「女」、「老いゆくオリンポス神ゲーテの名だたるセックスパートナー」とする。同時代の連中は、「愛人」とか「淫婦」とかゲーテの「囲い者」「めぎつね」「いろ」「肉布団」などと陰口をたたいた。ヴィーラント (Christoph Martin Wieland) は、ゲーテの「女中」と考えていたし、シラー夫人のシャルロッテは「脳なしのデブ」と、アルニム夫人のベッティーナは「気がふれたブラッドソーセージ」と毒づく。カール・アウグスト公 (Carl August, Herzog) は「ヴルビウスが何もかも駄目にしてしまった」とするしている。(以上、2ページ) 1920年女性作家クララ・ホーファーはクリスティアーネを^{ネグロイド}黒色人種型に分類し、人種主義的な攻撃をしている。(3ページ)

ちなみに、ゲーテとクリスティアーネとのあいだの残存する両者の手紙は601通にもものぼる。そのうちの247通もの手紙をクリスティアーネはゲーテに書いて送っている。他の人々にも手紙を書いているであろう。「手紙を書くこと」、それは「無教養」ではなしえないのだ。ゲーテはクリスティアーネを「エロティコン [恋愛詩の義]」「いとしい小さな女^{ひと}」「家の恋人^{ハウス・シヤッツ}」「台所の恋人^{キュッヘ・シヤッツ}」「長年の女友達」、そして後年「妻」と呼んだ。ゲーテの母にとって息子のこの嫁は、「神の手になる素晴らしく純真な生き物」であった。(3-4ページ) ゲーテは一応、主婦としてのクリスティアーネに満足していたのであろう。姑との関係も悪くなかったようだ。他人の嫁さんの悪口を公然というものではない、胸にひそめておくか、「ここだけの話だ」といって、口の堅い一人だけにこっそり話すぐらいがよからう。

そして、ファウストに言うヘレナの最後の言葉は。

HELENA zu Faust.

Ein altes Wort bewährt sich leider auch an mir :
Daß Glück und Schönheit dauerhaft sich nicht vereint.
Zerrissen ist des Lebens wie der Liebe Band ;
Bejammernd beide, sag' ich schmerzlich Lebewohl
Und werfe mich noch einmal in die Arme dir.
Persophoneia, nimm den Knaben auf und mich ! (9939-44, S. 300)
Sie umarmt Faust, das Körperliche verschwendet, Kleide und Schleier bleiben ihm in den Armen,

ヘレナ (ファウストへ).

古いことばが、残念ですが、わたしに実証されました：
幸福と美とは、永遠に一つにはなれないのです。
生命の絆も愛の絆も引き裂かれました。
引き裂かれた二つの絆に嘆き悲しみながら、わたしは切ない思いでお別れを言います
もう一度、あなたの腕の中に抱いてくださいます。

冥界の女王ペリソポネ、この子とわたしをお引き受けください！

(ヘレナはファウストを抱きしめ、肉体は消えてしまい、衣服とベールが彼の腕の中に残る。)

この第3幕はファンタジーである。ヘレナは、この第3幕の冒頭に突如として現れる。第1幕で、ファウストは「母たち」(Die Mütter) という永遠の空虚が広がる黄泉の国からヘレナとパレスの虚像 (Gebilde) を連れ帰ってくる。ヘレナのそれは、かつて若返る前に、第1部の「魔女の厨」(Hexenküche) (2429-40) で、ファウストが見とれて眺めつづけていた鏡像でもあった。また、第2幕の「古代ワルプルギスの夜」(Klassische Walpurgisnacht) では、そのヘレナを探し求めて、古代ギリシャを動きまわる。しかし、どのような経過でヘレナが出現したのか、は明白ではない。ただいえることは、ヘレナが古代ギリシャの「美」のアレゴリーとして出現していることである。

ヘレナは、フォルキオスの助言を受け、ファウストに救助を求めてくる。ファウストはヘレナに臣下として「ミンネ」の礼をもって仕える。ファウストが言葉を発すると、ヘレナが韻をふみ、二人の気持ち (愛) が交互に行きかう状態になっている。そのあと、ヘレナとファウストは言い交す。

HELENA. Ich fühle mich so fern und doch so nah,
Und sage nur zu gern : Da bin ich ! da !
FAUST. Ich ateme kaum, mir zittert, stockt das Wort ;
Er ist ein Traum, verschwunden Tag und Ort.
HELENA. Ich scheine mir verlobt und doch so neu,
In dich verwebt, dem Unbekannten treu.
FAUST. Durchgrüble nicht das einzigste Geschick !
Dasein ist Pflicht, und wär's ein Augenblick. (9411-18, S. 284)

ヘレナ. とても遠くにいるような、それでいてとても近くにいるような気がします。
ただ喜んで言えますのは、ここにわたしはいる！ ここに！と。
ファウスト. わたしはもう息ができません、ふるえています、言葉が詰まります。
それは夢です、時も所もきえてしまいました。
ヘレナ. すでに一生を終えたはずなのに、新たに生まれ変わったような気がします。
あなたに絡み合い、知らないあなたに心を捧げながら。
ファウスト. またとないこの運命をあれこれと思い煩うことはない！
現に存在すること、それが義務です、たとえ束の間であっても。

ヘレナが自身を「遠く」に感じ、また「近く」に感じている。ヘレナが「遠く」にいて不在の存在でありながら、「ここにいる」と身近に具現する時であることとその具現を新たに

強調しているのであろう。ファウストはそれに応じて、この時を、震えながら、言葉に詰まりながら、ただ「夢」だ、「時と所」の消滅だ言いながら、「美」の本質を、「時と所」を超えたいつろいやすい存在として認識する。そこでヘレナはもう一度、自分の新たなる実在を確信し、賛美するのである。アレゴリーが人間と溶け合って、新たに生まれ変わったギリシャのヘレナにとって、ドイツ人のファウストは未知の人であった。しかしヘレナは、ファウストに信頼を寄せてひとつになっていく。二人の間のこの信頼において、古典ギリシャの精神の再生が、遠く離れた時代においても可能となるのである。そして、ファウストの運命を詮索するなというような言葉が、一切の過去を超越することを、現在の瞬間を生きている実感を彷彿させる。ファウストも、この充足した時間に信頼を寄せているように思えるヘレナの出現についても、思い煩う必要もないのであろう。

先のヘレナの最後の言葉にもどろう。ひとつになれない「幸福」と「美」、引き裂かれた「生命の絆」と「愛の絆」。それら是对立し、相克する事象なのか。実在する実像としてのファウスト、実在性がなく主観的な仮象としてのヘレナをこれらにあてはめることもできよう。実生活における「幸福」と「生命の絆」、イデーとしての「美」と「愛の絆」。おそらく、前者をファウストに、後者をヘレナに列することができるであろう。そして、芸術は、この両者を結びつけることに多大な時間と労力を浪費してきた。しかし、この離反していく二つの概念群に、それぞれを貫く共通の本質があるのではないだろうか、とわたしは思ったりする。「天使と悪魔」や「白と黒」とか、「愛と憎」というような極端に限りなく離反してしまった事象に、なにか親近性を感じるのである。ヘレナとファウストとの間を結びつける共通の本質が、オイフォリオンという概念化された芸術的な形象によって形成されていたのかもしれない。しかし、「若さ」には未来へに「希望」があったとしても、実質がない。それが崩れ落ちると、我々に内包されるべき「美」も崩壊し、悲劇に終わったのである。

最後に、二人は抱き合い、ヘレナの肉体は消えて、ふたたび見えない領域へ、黄泉の国へと戻っていった。ただ、衣服とベールが、ファウストの腕の中に残る。メフィストフェレスが仮装しているギリシャの化け物のフォルキアスが言う。

PHORKYAS zu Faust.

Halte fest, was dir von allem übrigblieb.

Das Kleid, laß es nicht los. Da zupfen schon

Dämonen an den Zipfeln, möchten gern

Zur Unterwelt es reißen. Halte fest!

Die Göttin ist's nicht mehr, die der hohen,

Unterschätzbaren Gunst und hebe dich empor :

Es trägt dich über alles Gemeine rasch

Am Äther hin, so lange du dauern kannst.

Wir sehn uns wieder, weit, gar weit von hier.

(9945-54, S. 300)

フォルキアス（ファウストに）

その手に残ったものを、しっかりつかんでいなさい！
その着物、それを離すな！ もうすでに悪霊たちが
その裾を引っ張って、地獄へと
引っさらおうとしている。しっかりとつかんでいなさい！
それは女神ではありません、女神をあなたは失ったのです。
だがそれは、神々しいものです。高貴な
計り知れないほどの恵みを使って、あなたを高みへと上げるのです。
それは、あらゆる卑俗なものを越えて
澄みきった天空に沿って、あなたを運んでいきます、あなたが堪えうる限りは。
またお会いしましょう、遠くで、ここからずっと離れたところで。

このあと、ヘレナの服は雲となってファウストを空の彼方へと運んでいく。また、メフィストフェレスは、ギリシャの醜い大女フォルキアスの仮装をとって正体を現し、この場は幕を下ろす。

このメフィストフェレスの言葉はおかしい。「つかんでいなさい」(Halte fest!) や「それを離すな」(laß es nicht los!) とか、また高みへと上っていくことを示唆する。人間を不幸にさせて、地獄へ、奈落へと落とすのが悪魔の仕事のはずではなかったのか。「無」がその本質ではなかったのか。まるで人間化した悪魔のようで、おもわず「メフィスト君、どうしたの？ 君らしくないね、善人みたいだよ。どこか悪いの？」と問いかけてしまいそうである。ファウストへの自己紹介で、メフィストフェレスは、次のように言う。

MEPHISTOPHELES.

Ein Teil von jener Kraft,

Die stets das Böse will und stets das Gute schafft.

FAUST.

Was ist mit diesem Rätselwort gemeint ?

MEPHISTOPHELES. Ich bin der Geist, der stets verneint !

Und das mit Recht ; denn alles, was entsteht,

Ist wert, daß es zugrunde geht ;

Drum besser wär's, daß nichts entstünde.

So ist denn alles, was ihr Sünde,

Zerstörung, kurz das Böse nennt,

Mein eigentliches Element.

(1335-44, S. 47)

メフィストフェレス.

つねに悪を欲し、

つねに善をなす、あの力の一部です。

ファウスト.

こんな謎めいた言葉で何を言いたいのだ。

メフィストフェレス、 わたしはつねに否定する霊です。
それは当然でしょう。生じてくるものすべて、
滅んでいくものですから。
だから何も生じないとしたら、そのほうがもっと良いでしょうに。
そう、あなたたちが罪だとか、破壊だとか、
つまり悪と名付けているものすべてが、
わたしの本来の要素なのです。

つまり、メフィストフェレスの本来の要素は、私たちが「悪」と呼んでいるものである。あらゆることは滅び、「無」に帰するものであるから、むしろ生成しないほうが良いと考えている。それなのにこの場では、ファウストを勇気づけ、衣服を離さないようにしっかりとつかめと励ます。メフィストフェレスの悪魔としてのプライドはどこに行ってしまったのか、その矜持を捨ててしまったのか。元来虚像で、「無」でしかなかったはずのヘレナを、そのアトリビュートをつかめというのだ。感情にはやることもある若返ったファウストを、事前の準備をして、いつも冷静な判断に導いていたメフィストフェレスには、常軌に逸した言動になったといえよう。慌てふためいた人間の咄嗟の言葉のような、落ち着きを失った行動に駆られてしまうことが、悪魔にもあるようだ。ちらっと人間の顔を見せてくれたメフィストフェレスのこのセリフを、私は好きなのである。

このあと、ヘレナの衣服は雲となって、ファウストを高めへ、かなたへと運んでいく。あとに残された侍女たちも、その合唱によって自然へと帰っていく。正体を現したメフィストフェレスも、ギリシャを去って行くことが暗示される。

すべては「無」に帰したといってよい。形あるものはすべて消えてしまう。命あるものもすべて、「死」から逃れることはできない。しかし、この結末が、新たなる始まりを告げてもいる。たとえ「無」に帰したといえど、新しいものが生起してくることを、メフィストフェレスは、囁かずも口に出してしまったようである。

そして、この第3幕は静寂のなかで閉じられることになる。 (2019. 12. 31)

II. 「仮面舞踏会」 Notizen über “Faust”2 —‘Mümmenschanz’—

2. 仮面舞踏会

「仮面舞踏会」という場はない。第2部の第1幕「控えの間がつづく大広間」(WEITLÄUFIGER SAAL MIT NEBENGEMÄCHERN) という場があり、その大広間は、謝肉祭の「仮面舞踏会」(Mümmenschanz) のために、きれいに、またごたごたと飾りつけられてある。

なぜこの場を選んだのか、というと、退屈だからである。学生に『ファウスト』の日本語訳（どの翻訳でもよいのだが、近年は池内紀訳を薦めている）を読んで、レポートの提出を課す。読むのがつらいのか、最初を読んだだけで止める学生、途中で投げ出す学生、特に2

部は読まない。作品とは直接関係のないテーマでレポートを書く学生や、コピペのレポートを提出する学生も、また、催促しても提出しない学生もいる。この作品の名前と作者だけは誰もが知っており(多分?)、わたしなどは人類の宝物だと考えている。学生も「面白くない」とは言わない(言う学生もいる)、総じて「退屈だ」と言う。「どうして、面白いのに」と思いながらもわたしは、「君は正しい。退屈だと君が思うところは、ゲーテも退屈だと思わせるように書いているのだから」と言っておく。全編を通じて「退屈だ」と感じているのなら困るのだが、ただ、いつの日か再度、この作品を読むような機会があることを望んでいる。その時にはきっと、この作品から何かをつかんでくれるであろうと確信しているし、そのような作品なのである。

わたしが退屈だと思うのは、この場である。おそらくゲーテも似たような経験があるのであろう。ワイマールの宮廷でも、ゲーテも出席しなければならなかった宴が幾度も開かれて、つまらない思いをしたのではないだろうか。この場でも、仮装した連中のだらだらと次から次へと続くおしゃべりに、風刺も多分にあるのだが、うんざりもする。

第1幕で、第2部の展開を導く契機が準備されている。一つは、第2幕をへて、第3幕の「ヘレナ悲劇」へと展開していく。もう一つは、第4幕から第5幕へと続いて、理想の国の建設を目論みながら、ただ予感だけで終局を迎える「支配者の悲劇」へと続く。

この第1幕で特筆すべき事件は、「兌換紙幣」の発行である。「紙幣」をドイツ語では‘Papiergeld’ (紙のお金) や ‘Geldschein’ (お金の証明書) という。つまり、紙切れなのだ。近世の資本主義市場経済が生み出した、物と物との交換における媒介手段である。本来、紙切れにすぎないのに、生きることに必要な物資をそれと交換できる。大量にあれば、金や銀などの本当に価値のあるものとも交換できるし、欲深い人間の心さえも奪ってしまう。まこと、摩訶不思議な媒体物であり、人間を操る悪魔の差し金であるというしかない。「兌換紙幣」は一応、正貨(金貨や銀貨)との引き換えが保証されているが、現在、世界中で使用されている「不換紙幣」は、発行主体の経済力だけに裏付けされており、現在でもしばしば、紙屑になってしまうことがある。しかし、それがなければ日常生活に支障をきたすので、余るほど大量にお持ちの方は、金銀に換えておくことを薦める。また、神仏の加護を授かるために、徳を施す手段にするのも良いであろう。悪魔に呪われた財宝といえども、教会に寄進すればよい。それらを十分に消化できる丈夫な貪欲な胃袋を教会は持っているらしい。(第4幕の最終の場) ‘Gott segne dich!’ (神様、ご加護のほどを!)

第2部の第1幕「皇帝の城・王座の間」(KAISERLICHE PFALZ・SAAL DES THRONES)は、皇帝の登場から始まる。右に「天文博士(占星術師 der Astrologe、賢者 der Weise)」を、左に「道化(阿呆 der Narr)」を引き連れて、颯爽と登場するはずであった。なぜか、デブの「道化」は階段のところで倒れて死んだようになり、運び去られてそこにはいない。その代わりにすぐさま、怖い顔をした痩せっぽちのメフィストフェレスが、なぜか、衛兵の銃槍

をかわして、王座のすぐそばで、新手の道化として、皇帝に取り入ろうとする。そして、メフィストフェレスも道化として、王座の左側に立ち、評定が始まるのである。最初に皇帝が次のように言う。

KAISER. Und also, ihr Getreuen, Lieben,
Willkommen aus der Nah' und Ferne!
Ihr sammelt euch mit günstigem Sterne,
Da droben ist uns Glück und Heil geschrieben.
Doch sagt, warum in diesen Tagen,
Wo wir der Sorgen uns entschlagen,
Schönbärte mummenschänzlich tragen
Und Heitres nur genießen wollten,
Warum wir uns ratschlagend quälen sollten?
Doch weil ihr meint, es ging' nicht anders an,
Geschehen ist's, so sei's getan. (4761-71, S. 150)

皇帝. それでは、忠実なおんみら、
近くから、遠くからとよくぞ来られた。
おんみらは、我々の幸福と平安がしるされた
よき星のもとに参集された。
だが、どうしてなのだ、われわれが日々の心配事を払いのけ、
ひげのついた仮面をつけ、仮装をして、
ただ陽気に、愉快地に楽しみたい、この日々に、
どうして、われわれは評定などして苦しまなきゃならないのだ？
だがおんみらが、そうするしかないと言うから、
このようになってしまった、さあ済ませてしまおう。

この皇帝は、国家の案件を協議することが嫌なようである。国家財政はすでに破綻しているのに、皇帝の気持ちは謝肉祭の仮装舞踏会のほうに向いている。民のことも考えず、臣下とともに、日々、享楽のうちに過ごすことが、この皇帝の求めていることらしい。略奪や強盗は日常茶飯であり、おべっかや賄賂がまかり通り、裁判官も犯罪者になってしまうような有様である。給金をもらえない傭兵たちは暴れまわり、国の金庫は空っぽのままである。これは腐敗墮落した国家の典型であり、それが、第5幕で、ファウストをして、理想の国家の建設へとつながっていく。

謝肉祭の最中の評定である。やる気のない皇帝にメフィストフェレスは、国土の地下（すべて皇帝のものらしい）に埋まる財宝を掘り出すことを提案する。そして、掘り出されるで

あろう財宝を担保にして、兌換紙幣を発行することにつながっていくのである。メフィストの言葉尻をとらえ、聖職者でもある宰相 (Kanzler) は、人間の「天性と精神」について、“Natur ist Sünd, Geist ist Teufel, / Sie hegen zwischen sich den Zweifel, / Ihr mißgestaltet Zwitterkind.” (4900-02, S. 154)「天性は罪、精神は悪魔 / この両者は、それらの間で疑念を育てる、/ 作りぞこないの両性具有の子供を」と、無神論者は火炙りだ、と詰め寄る。メフィストは、相手を持ち上げながら、わけのわからぬことを言ってはぐらかす。言い合いのうんざりしている皇帝は、欠乏している金銭を造ることを、すぐさま地下に眠る財宝を掘り出すことを要求する。

KAISER. Die lass' ich dir! Was will das Düstre frommen?
Hat etwas Wert, es muß zu Tage kommen.
Wer kennt den Schelm in tiefer Nacht genau?
Schwarz sind Kühe, so die Katzen grau.
Die Töpfe drunten, voll von Goldgewicht —
Zieh deinen Pflug und ackre sie ans Licht.

MEPHISTOPHELES. Nimm Hack' und Spaten, grabe selber,
Die Bauernarbeit macht dich groß,
Und eine Herde goldner Kälber,
Sie reißen sich vom Boden los.
Dann ohne Zaudern, mit Entzücken
Kannst du dich selbst, wirst die Geliebte schmücken;
Ein leuchtend Farb- und Glanzgestein erhöht
Die Schönheit wie die Majestät.

KAISER. Nur gleich, nur gleich! Wie lange soll es währen! (5031-47, S. 157-8)

皇帝. おまえにまかせる! 闇にあるものがなんの役に立とう?
価値のあるものなら、白日の下に出さねばならぬ。
漆黒の夜に、悪党を誰が見分けられようか?
ウシたちも黒いし、ネコどもも灰黒だ。
黄金を含有する壺らがこの下にある—
さあ、鋤をとって、それらを明るみへと掘り出せ。

メフィストフェレス. 鋤や鋤をお取りください、ご自分で掘るのです、
百姓の仕事をなさることが、あなた様を偉大にさせます。
金の子牛たちが群がって、
大地からもぎれるように出てくるでしょう。
そうなれば、ためらうこともなく、大きな喜びを抱いて、

あなた様はご自身を着飾ることも、お妃さまを美しく飾ることもできましょう。
輝き光る色とりどりの宝石が
美しさをご威光を高めてくれるでしょう。

皇帝. さあ、すぐにだ！ すぐにだ！ どれだけこのままにしておくのだ！

発掘を急がすだけの皇帝に、「鍬を取れ」とメフィストフェレスはまっとうなことを言っている。民の仕事を知れ、ということか。それは、民の生活を知ることにもなろう。百姓と共に、自ら鍬をもって土を掘り起こすような皇帝なら、自らの経国の志を民と共に民の下で具現化することである。豊かな国でなくとも、治安も保たれ、その財政が崩壊するようなことはない。そうすれば、輝くように着飾って、王妃と共に、民の前に立ったとしても、歓呼の声で迎えらるることであろう。しかし、この皇帝はそんなことにも気付かない。もうメフィストフェレスはあきらめたのであろうか。はやる皇帝に、メフィストフェレスは右側にいる「天文博士」の口を借りて次のように言う。“Herr, mäßige solch dringendes Begehren, / Laß erst vorbei das bunte Freudenspiel ; / Zerstreutes Wesen führt uns nicht zum Ziel.” (5048-50, S. 158)「陛下、そのような執拗に望まれますことをお静めくださいませ、/ まずは先に、あでやかな楽しい催しをやり過ぎましょう；/ イライラしたようなことでは、目標に到達することもかないません」

このように言われると、この皇帝の念頭には、国の窮状などもはやない。これに続く皇帝の台詞とメフィストフェレスのこの場を締めくくる箴言ともいえる言葉を引用する。

KAISER. So sei die Zeit in Fröhlichkeit vertan !
Und ganz erwünscht kommt Aschermittwoch an.
Indessen feiern wir, auf jeden Fall,
Nur lustiger das wilde Karnival.

Trompeten. Exeunt.

MEPHISTOPHELES. Wie sich Verdienst und Glück verketten,
Das fällt den Toren niemals ein ;
Wenn sie den Stein der Weisen hätten,
Der Weise mangelt dem Stein. (5057-64, S. 158)

皇帝. それじゃ、喜びの時を過ごそうではないか！
すべて望みどおりに、灰の水曜日が迎えられよう。
その間は、いずれにせよ、より楽しく愉快地に、
奔放なカーニバルを祝おうではないか。

(トラペットの吹奏。退場)

メフィストフェレス。 働いて糧を得ることと幸せがいかに繋がっているかを、
そのことを、この馬鹿どもには全くもって思いつきもしないのだ；
たとえ賢者の石を手に入れたとしても、
その石には賢者が欠けている。

おおむね三月の第一水曜日にあたる「灰の水曜日」は、復活祭前日まで続く「四旬節」の初日である。カーニバルはキリスト教起源の祭事ではない。このあと、罪の悔い改めと断食が40日続く。そのことが、この皇帝の念頭にあるのだろうか。この皇帝もそのことを知っているはずだ。しかし、それをこの皇帝に期待できるとは到底考えられない。メフィストフェレスはもう、この皇帝を見限っている。遊興も、辛苦があってこそ意味を持ち、楽しみと喜びをもたらすものである。メフィストフェレスが言う 'Verdienst' とは、働いて得る報酬であり、その労働に相応しい対価として受ける報酬である。軍用地料とか株式の配当金とか、働かないで得る所得ではない。わたしは、軍用地主でもないし、株式も持っていない。ただの年金生活者で、もちろん、二千万円の貯金もない。四十年近く働いて掛金を払い続けたのに、今受け取っているわずかな年金も所得とみなされ、税金をとられる。なにか納得がいかない。これも悪魔の差し金で、税金で給与を得ている税務署員は、その手下なのであろう。

「賢者の石」は、中世の錬金術師と呼ばれた人々が探してもとめたものである。あらゆるもの（主に、鉛とか錫）を高価なもの（金）に変える物質や、すべての病気をなおす、不老不死の仙薬などがこれにあたる。「賢者の石」は、ハリー・ポッターのシリーズにもあり、それをモチーフにしたマンガもいくつかあるようで、それを題材にして発表した学生もいた。舞台は現代社会になっており、その結末はあまり良いものではなかった、と記憶している。富（金）を生み出す「石」は多くある。しかしそれが、人間を豊かな生活へと導く、あるいは幸せな生活を営むに資する、そのような役割りを果しているであろうか。その「石」を使うのが人間だとするのなら、「賢者」に含まれている意味は、問い続けられていく。「生き方」に関わってくるのかもしれない。ただ、この宮廷には、たとえ財宝が発掘されたとしても、適切な運用を期待できるさまではないようだ。

次の場ではすぐさま、仮装舞踏会がはじまる。「先触れ」(Herold) に先導され、登場したものの者たちがそれぞれ、その仮装に相応した口上を述べていく。様々に意匠をこらした口上ではあるのだが、長々と続くのには、少し我慢も必要となる。気になる箇所を引用してみる。

万物を生み養い育てる大地の富を象徴する神プルートス (Plutus) を玉座にのせ、ペガサスが牽く車を操る「少年馭者」(Knabe Wagenlenker) は、次のように自己紹介をする。

KNABE LENKER. Bin die Verschwendung, bin die Poesie ;
Bin der Poet, der sich vollendet,
Wenn er sein eigenst Gut verschwendet,
Auch ich bin unermesslich reich

Und schätze mich dem Plutus gleich,
Beleb' und schmück' ihm Tanz und Schmaus,
Das, was ihm fehlt, das teil' ich aus. (5573-79, S. 173)

初年駁者. わたしは浪費です、「詩」です、
もっとも自分の良きものを浪費するときに、
自己自身を完結させる詩人です。
わたしも計り知れないほど豊かで、
プルーツ様と同じように豊かです。
プルーツ様を、舞踏や宴で活気づけ、飾りたてます、
プルーツ様に欠けているものを、それをわたしは配ります。

美少年の「少年駁者」は自らを「浪費」と呼び、「詩」と呼ぶ。そして、自己のもので、良きものを浪費することで、自己を完結していく「詩人」だという。「詩」で糊口を凌ぐことはできない。内面の緊張を強いる多大な時間を消費し、わずかの詩行が手元に残るだけである。しかし、それが自己の最善のものを表現しえたとしたら、美少年の「少年駁者」には、自己を完結させた精神の喜びがあり、プルーツと比肩するほどに「豊か」になっている実感を持つ。そして、その豊かさを人々に配っている、というのだ。

仮装会場を巡ったのであろう、ファウスト扮するプルーツは、車を止めさせ、黄金の入っているとする櫃を下して、「少年駁者」の任を解く。

PLUTUS zum Lenker. Nun bist du los der allzulästigen Schwere,
Bist frei und frank, nun frisch zu deiner Sphäre!
Hier ist sie nicht! Verworren, scheckig, wild
Umdrängt uns hier ein fratzenhaft Gebild.
Nur wo du klar ins holde Klare schaust,
Dir angehörst und dir allein vertraust,
Dorthin, wo Schönes, Gutes nur gefällt,
Zur Einsamkeit! — Da schaffe deine Welt. (5689-96, S. 176-7)

プルーツ(御者に). お前は、極めて困難な仕事からもう解放されている
お前は、自由に気軽に、新たな気持ちでお前の世界に戻りなさい!
ここはお前の世界ではない! もつれて、まだらに、乱れて
ここではわれわれにグロテスクな産物が群がってくる。
ただお前が、澄んだ気持ちで快い鮮明なものなかへと見つめるところに、
お前と密接に結ばれ、お前だけを信じているところに、

「美」と「善」だけを好むようなところに、
孤独に戻れ！ —そこでお前の世界を創るのだ。

任務を終えた「少年駈者」に、ファウストが扮するブルトスは、魑魅魍魎が跋扈するこの現実の世界から離れて、自分の世界へ戻れと命じる。おのれ自身が信じ、おのれ自身をまた信じている、おのれと密接につながっている世界へ戻れ、と命じる。それは自己の内面の明晰さに深く没していく「孤独」の世界である。ゲーテは、仕事場を近郊の大学都市イエナ(Jena)に持っていた。そこで、一ヶ月も二ヶ月も閉じこもって創作に専念することも多かった。ワイマールでは、日常の雑事から解放されることもなかったのであろうか。ファウストの口を借りたゲーテの言葉である。

それに応えて、「少年駈者」は言う。

KNABE LENKER. So acht' ich mich als werten Abgesandten,
So lieb' ich dich als nächsten Anverwandten.
Wo du verweilst, ist Fülle : wo ich bin,
Fühlt jeder sich im herrlichsten Gewinn.
Auch schwankt er oft im widersinnigen Leben :
Soll er sich dir ? soll er sich mir ergeben ?
Die Deinen freilich können müßig ruhn,
Doch wer mir folgt, hat immer was zu tun.
Nicht insgeheim vollführ' ich meine Taten,
Ich atme nur, und schon bin ich verraten.
So lebe wohl ! Du gönnst mir ja mein Glück ;
Doch lisle leis', und gleich bin ich zurück. Ab, wie er kam.

(1697-1708, S. 177)

少年駈者. わたしは自分をあなた様のかけがえのない使者とっており、
それでわたしは、あなた様をいちばん近い親戚のような好意を抱いております。
あなた様のとどまる場所には豊かさがあり、わたしのいるところでは
誰もが素晴らしいものを得たと感じております。
またその人たちは、しばしば不条理な現実の生活の中で揺れているのです。
あなた様に身をゆだねるべきか？ わたしにゆだねるべきか？
あなた様についた者たちはもちろん、無為に安らぐことができます、
でもわたしに従う者は、いつもすることがあるのです。
誰にも知られずにわたしは何もできないのです。
わたしがただ息をするだけで、もう悟られてしまっているのです。

ではお元気で！ あなた様はわたしを幸せにしてくださいます。
小さな声でおよびください、すぐに戻ってまいります。

(退場、出てきた時と同じように)

美少年の「少年馭者」は、富の神プルートスに共感を覚え、親近の情を抱いている。プルートスもまた同様であろう。プルートスが与えるものは、「豊かさ」であり、詩人が与えるものが「すばらしいもの」を得たという感受である。数行の詩が、人々に感動を与えたとしても、それは純粋な喜びであり、甘美なブドウの水滴で渴きをいやすこと、美食をもって空腹を満たすことなどできない。教会や貴族、富豪の市民階級など、パトロンを得て、その生活が成立していた時代である。「少年馭者」の最後の言葉は、常に軋轢を生じかねない芸術と生活との間に折り合いをつける詩人ゲーテの生きる知恵を表現しているのである。

富を得たならば、真を、善を、美を、発現する営みである芸術に人の心は向かうものであろう。現実がたとえ不条理な生活であったとしても、そのなかで、文化的な精神の拠り所を求めるのが人間なのかもしれない。また詩人は、無為に見えていてもその精神は休むことなく動いている。ゲーテもベッドでクリスティアーネの背中を指でたたきながら、韻律を確かめることもあった、と、なにかの本で読んだことがある。それほど、詩人は忙しいのだ。

また、詩人は「孤独」のなかで、その世界を創る仕事をするのなら、静寂のなかに自己を沈潜させることになる。しかし「少年馭者」は、息をするだけで誰かに悟られてしまう、という。どのように考えればよいのか判断できない。手塚富雄氏はその訳注で、「真実を告げる詩人は、何もかもさらけ出さねばならない」と解釈している。(『ファウスト』悲劇第2部(上)、中公文庫、274ページ) 真実を表白する詩人の創造行為が、結果として自己をさらけ出すのであって、詩人の一挙一動が外からうかがわれているのではないはずだ。どのように解するのか分からないが、この場面の雰囲気からすると、否定的な意味はない。「少年馭者」の形姿に喜びの表情さえも浮かんでいるようだ。この「少年馭者」は、第三幕の「アルカディア」の場で、「オイフォリオン」の形姿をもって呼び出されている、という解釈もある。

このあと、プルートスは炎となったその富をまき散らす。謝肉祭の余興であるのに、バカな大衆は、混乱、叫びのなかでそれを奪い合い、その暑さから逃げ惑うこととなる。しばらくしてその混乱を、プルートスは水と空気で収めていく。この場面はアレゴリーで、炎によって示される金目のものに目が眩み、右往左往するのは大衆であり、人間一般を揶揄しているのである。これで一応、富を撒き終わったことも示している。

次の場「遊歩庭園」(LUSTGARTEN)は、次に日の朝である。

皇帝が廷臣たちを連れ、傍にファウストやメフィストフェレスが控えている。晴れやかな表情の廷臣たちから、国の窮状が失せて、国情が好転していることが報告される。それは兌換紙幣の発行によるものであった。

KANZLER, der langsam herankommt.

Beglückt genug in meinen alten Tagen.—
So hört und schaut das schicksalschwere Blatt,
Das alles Weh in Wohl verwandelt hat.
Er liest. "Zu wissen sei es jedem, der's begehrt :
Der Zettel hier ist tausend Kronen wert.
Ihm liegt gesichert, als gewisses Pfand,
Unzahl vergrabnen Guts im Kaiserland.
Nun ist gesorgt, damit der reiche Schatz,
Sogleich gehoben, diene zum Ersatz" (6054-62, S.187)

宰相 (ゆっくりと近づいてくる)。

このような老齢になって、これほどに喜びを感じますとは—
それでは、このきわめて重要な書面をお聴き取り、ご覧ください。
この書面がすべての苦悩を幸福に変えてしまいました。
(読み上げる)「知ることを求める方々に、それを知らしめる :
この紙片は千クロネに値する。
確かな担保として、帝国内の
埋蔵する無数の財宝がそれを保証する。
直ちに掘り出すべく、財宝が、
兌換に資するよう、用意されている」

宰相は兌換紙幣を 'Zettel' と言っている。まさに「紙片、紙切れ」なのである。江戸時代の藩札などは証文ともいえないような小さな紙きれである。当然発行には兌換準備がなされてなければならない。しかし、その準備がなされておらず、兌換要求に対し、その価値の停止処置で、まさしく紙くずになってしまったことも多々ある。また、物価騰貴の原因にもなり、民衆の暴動、一揆を引き起こすこともあった。実際には、兌換保証をする正貨を準備することも少なかったようだ。できなかつたのであろう。この帝国の場合、この皇帝を考えれば、どのような状況に立ちいるのか、想像もできよう。第4幕がそれを示している。しかしこの時、皇帝は兌換紙幣の発行に署名しているとは、気が付いていなかったようだ。

KAISER. Ich ahne Frevel, ungeheuren Trug!
Wer fälschte hier des Kaisers Namenszug?
Ist solch Verbrechen ungestraft geblieben? (6063-65, S. 187)

皇帝. 忌々しいことだ、まったくの欺瞞だ！
誰がここに皇帝の自筆署名を偽造したのか？
このような犯罪が処罰されずにいるのか？

兌換紙幣など、紙切れが正貨の代用だとするのなら、まさしく詐欺行為であり、犯罪だといえる。ここの皇帝は、正義の人である。しかし、謝肉祭の騒ぎに中でどうも署名をしていたようだ。この皇帝は、ファウストが演じたプルートの炎の演舞を克明に覚えているのだが、署名したことなど記憶の片隅にもない。大蔵卿（Schatzmeister）が次のように言う。

SCHATZMEISTER. Erinnre dich! hast selbst es unterschrieben ;
Erst heute nacht. Du standst als großer Pan,
Der Kanzler sprach mit uns zu dir heran :
“Gewähre dir das hohe Festvergnügen,
Des Volkes Heil, mit wenig Federzügen.”
Du zogst sie rein, dann ward's in dieser Nacht
Durch Tausendkünstler schnell vertausendfacht.
Damit die Wohltat allen gleich gedeihe,
So stempelten wir gleich die ganze Reihe,
Zehn, Dreißig, Funfzig, Hundert sind parat.
..... (6066-75, S. 187)

大蔵卿. お覚えでないのですか！ ご自身で署名なされたのです。
昨夜のことです。あなた様は大神パンのお姿であられました、
宰相が私たちと共にあなた様に近づき、乞われたのです。
「この盛り上がった祝祭の喜びを、民の平安を
一筆お書き入れになるよう、お聞き入れくださいませ」
あなた様はそれをお書きになれ、その夜に
巧みな者たちによって、急いで数千枚刷られております。
その恩恵がすべての民にひとしく、賜れますよう、
すぐに、一枚一枚すべてに捺印いたしました。
十、三十、五十、百クローネ札の準備ができております。
.....

宰相に要請されたときには、なにも言はず、皇帝は署名している。しかし、これでは「兌換紙幣」発行の要請かどうか判らない。確かめもしなかったとしたら、どうも、自失の状態にさせられていたようだ。また、一夜にしてすべての兌換紙幣が作成されて流通してしまっ

ている。人間技とは思えない。こんなことができるのは、悪魔メフィストフェレスの他にはいない。誰もがメフィストフェレスに踊らされているのである。不信感を抱きながらも、民が喜んでいることを知らされると、皇帝は認めざるをえないことになる。兌換方法もメフィストフェレスのいい加減な説明に全員が納得し、財宝の発掘をファウストとメフィストフェレスに託すのである。

この場の終わりに、第一幕の最初、皇帝の傍らに控えている「道化」として登場するはずであった「阿呆」が現れて（「道化」と「阿呆」はドイツ語で同じ単語）は、皇帝とメフィストフェレスとの間で、紙幣についてやり取りをする。

NARR, *herbeikommend.*

Ihr spendet Gnaden, gönnt auch mir davon!

KAISER. Und lebst du wieder, du vertrinkst sie schon.

NARR. Die Zauberblätter! ich versteh's nicht recht.

KAISER. Das glaub' ich wohl, denn du gebrauchst sie schlecht.

NARR. Da fallen andere: weiß nicht, was ich tu'.

KAISER. Nimm sie nur hin, sie fielen dir ja zu. Ab.

NARR. Fünftausend Kronen wären mir zu Händen!

MEPH. Zweibeiniger Schlauch, bist wieder auferstanden?

NARR. Geschieht mir oft, doch nicht so gut als jetzt.

MEPH. Du freust dich so, daß dich's in Schweiß versetzt.

NARR. Da seht nur her, ist das wohl Geldes wert?

MEPH. Du hast dafür, was Schlund und Bauch begehrt.

NARR. Und kaufen kann ich Acker, Haus und Vieh?

MEPHISTOPHELES. Versteht sich! Biete nur, das fehlt dir nie.

NARR. Und Schloß, mit Wald und Jagd und Fischbach?

MEPHISTOPHELES. Traun!

Ich möchte dich gestrengen Herrn wohl schauen!

NARR. Heute abend wieg' ich mich in Grundbesitz! -Ab.

MEPHISTOPHELES solus.

Wer zweifelt noch an unsres Narren Witz! (6155-73, S. 189-90)

阿呆、(近づいてくる)。

恩恵をお与えくださいますのか、わたくしめにも一部お恵みくださいませ。

皇帝. こやつ、生き返ったのか、これも酒に消えてしまうであろう。

阿呆. 魔法の紙切れだ! どうもよく分らんのですが。

皇帝. そうだろう、どうせうまく使うこともできまい。

阿呆. いくつか魔法の紙切れが落ちてきましたが、どういたしましょうか。
皇帝. 受け取っておけ、お前の手に転がり込んだのだ。 (退場)
阿呆. 五千クローネが手に入った！
メフィスト. 二本脚の革袋、またもやよみがえったのか？
阿呆. わたしにゃ、ときどきあることで、でも今日ほどよい目覚めはない。
メフィスト. 喜んでいるのだな、汗まみれだ。
阿呆. ちょっと見てほしいな、これが本当にお金の値打ちがあるのですかね？
メフィスト. 喉や腹が欲するものなら、何でも手に入るさ。
阿呆. 田畑や家、家畜だって買えるのかい？
メフィストフェレス. もちろんだとも。いい値を示せば、お前さんにはそれぐらいあるだろう。
阿呆. それじゃ城は、森や猟場や釣りのできる小川があるのは？
メフィストフェレス. 大丈夫だ。
お前さんのいかめしい領主姿を見たいものだ。
阿呆. 今晚は土地を所有する夢でもみようか。 — (退場)
メフィストフェレス. (ひとりで)
誰がこの阿呆の才覚を疑えようか？

「阿呆」は、兌換紙幣を「魔法の紙切れ」と言って、使い方も分かっていない。紙幣を初めて手にしたときの一般大衆の姿なのかもしれない。金や銀や銅などでできた、ずっしりと重い硬貨ではない。「金」だといわれても、それが突然紙切れに変われば、戸惑うのも当然である。どうも勝手が違うようだ。思い出すのは、娘が小さくて本当に可愛かった頃、お年玉で、千円札の入ったポチ袋を渡したところ、受け取りを拒否した。お金ではない、というのだ。それで財布の中にあつた百円硬貨三枚を出して見せ、「交換するか？」ということ、交換したことがあつた。これが正常な感覚であろう。皇帝も撒くようにして紙幣を阿呆に与えている。このいい加減なぞんざいな扱いは、皇帝自身もまだ心に惑いを振り払うこともできないでいることを、使い方もまだ不明であることを示しているようだ。国家財政を一時的にも支える貴重なものとして認識しているのなら、このようなことをするはずがない。

メフィストには、その使い方を尋ねている。「クローネ」は「王冠」を意味しており、現在でも北欧や東欧の諸国の通貨として用いられている。「ユーロ」が導入された国では、廃止されている。この時代の五千クローネは、どのぐらいの価値があるのか？ 喉を潤し、腹を満たすことは勿論、田畑のある家屋も買えそうである。さらには猟場のついた城さえも買えるのか？ と。韻律を考えればこの言質は、「阿呆」の台詞が途切れ、このメフィストフェレスの台詞がそれを閉める役割を果たしながら、次行と脚韻を踏んでいる。浮き上がったような感を覚え、メフィストフェレスが「大丈夫！」(Traun!)と返答するまでに少し間があるようだ。返答に窮したのか、それとも思いがけない阿呆の才覚に感じ入ったのか、絶妙な間のとり方である。「二本足の革袋」と呼んで、いつも酔っぱらっているデブの道化を蔑

んでいた。どうせつまらないことに使ってしまうであろうと思っていたのに、その道化が、確実な使用方法を考えている。紙幣の有効性が長続きしないことも見越しているのであろう。我々も、紙幣を大量に所有することにでもなれば、不動産を買っておくことが、最良である。天変地異で破壊、消失しない限り、確実といえる。投機とか投資とかいわれて欲が絡むと、痛い目にあうこともあるが。紙幣発行に浮かっているなか、大勢に流されず、冷静な判断を阿呆がしている。それがメフィストフェレスの最後の言葉になっている。現代でも、「バカ者、ワカ者、ヨソ者」の発想を重んずべし、と言われることがある。「阿呆」とか「世間知らず」とか呼ばれてもめげる必要はない。このセリフを言うときのメフィストフェレスの表情はいかばかりかと思うのである。

お金の心配がなくなった皇帝は、ギリシャの美女、美男「ヘレナ」(Helena)と「パリス」(Paris)を見たいと言い出す。それをファウストは軽率に引き受けてしまう。メフィストフェレスを当てにしていたようだが、北方の悪魔はギリシャ世界に直接手を出せない。悪魔の世界にも守るべき掟があるらしい。メフィストフェレスはととても律儀で、義理堅いのである。また、この暇人たちの戯れがいかにかに難題であるのかをメフィストフェレスは言う。

MEPHISTPHELES. Du wahnst, es füge sich sogleich ;
Hier stehen wir vor steilern Stufen,
Greifst in ein fremdestes Bereich,
Machst frevelhaft am Ende neue Schulden,
Denkst Helenen so leicht hervorzurufen
Wie das Papiergespenst der Gulden. —
Mit Hexen-Fexen, mit Gespenst-Gespinsten,
Kielkröpfigen Zwergen steh' ich gleich zu Diensten ;
Doch Teufels-Liebchen, wenn auch nicht zu schelten,
Sie können nicht für Heroinen gelten. (6193-202, S. 191)

メフィストフェレス. あなたはそんなこともすぐさうまくいくと思違いしている。
ここで、わたしらは、より険しい段を目の前にしている。
あなたはまったくなじみのない領域に手を伸ばし、
つまりは恥知らずにも新たな借金をつくる。
グルデン金貨の紙のお化けのように、
ヘレナをそんなに簡単に呼び出せるとお思いか。
魔法のめかし屋、お化けの紡ぎもの、
せむしの小人ならすぐに用立てするのだが。
悪魔の情婦だと、文句が出ないとしても、

ギリシャのヒロインの代わりだと通すわけにもいくまい。

メフィストフェレスは兌換紙幣を「紙のお化け」(Papiergespenst)と言っている。まやかしたことになるんでも提供できるのだが。最高級で表示された「なじみのない領域」とは、単にギリシャという地政学的な相違を示しているだけではないようだ。ヘレナは古今のヨーロッパにおける「美」の象徴であり、「真・善・美」というようなことにかかわること自体、メフィストフェレスにはあってはならないことである。ヘレナの仮象(幻像、幻影?)を見たとき、「美人だ」と言って回りがほめそやすなか、メフィストフェレスは言う。“Das wär' sie denn! Vor dieser hätt' ich Ruh' ; / Hübsch ist sie wohl, doch sagt sie mir nicht zu” (6479-80, S. 199)「この女なのか! ときめきもしない。/ 確かにかわいい、だが俺には合わん」。これが、たとえまやかしたとしても、真実の形姿なら、もはや関与できる領域の対象ではないことを認識している。手出しのできないメフィストフェレスではあるが、今まで、つまらない真理を追究してきた人間のファウストにその可能性を示唆する。

MEPHISTOPHELRS. Ungern entdeck' ich höheres Geheimnis.

Göttinnen thronen hehr in Einsamkeit,

Um sie kein Ort, noch weniger eine Zeit ;

Von ihnen sprechen ist Verlegenheit.

Die **Mütter** sind es!

FAUST, aufgeschreckt.

Mütter !

MEPHISTOPHELES.

Schaudert's dich ?

FAUST.

Die **Mütter ! Mütter !** —'s klingt so wunderbar !

MEPHISTOPHELES. Das ist es auch. Göttinnen, ungekannt

Euch Sterblichen, von uns nicht gern genannt.

Nach ihrer Wohnung magst ins Tiefste schürfen :

Du selbst bist schuld, daß ihrer wir bedürfen.

FAUST.

Wohin der Weg ?

MEPHISTOPHELES.

Kein Weg! Ins Unbetretene,

Nicht zu Betretende ; ein Weg ans Unerbetene,

Nicht zu Erbittende. Bist du bereit ? —

Nicht Schlösser sind, nicht Riegel wegzuschieben,

Von Einsamkeiten wirst umhergetrieben.

Hast du Begriff von Öd' und Einsamkeit ?

(6212-27, S. 191)

メフィストフェレス. 打ち明けたくないのだ、この高度な秘密を!

女神たちが神々しく孤独のうちに君臨している。

やつらの周りには場所はない、時間さえもない。

やつらのことを語ると、気まずくなる。

「母たち」なのだ、それは！

ファウスト（びくっとして）。

「母たち」！

メフィストフェレス。

ぞっとするのか？

ファウスト。

「母たち！」「母たち！」— 奇異に響いてくる！

メフィストフェレス。

そうなんだ。女神たちは、

お前たち死すべき者と見分けられないし、わしらも呼び掛けたくもないのだ。

やつらの住み処に行くのは、奥の奥まで掘り進んでいかなきゃならんだろう。

女神たちを入り用になるなんて、あなたのせいですよ。

ファウスト。

どの道がそこはいくのだ？

メフィストフェレス。

道はない！ 誰も踏み入れたことのない、

踏み入れようもないのだ。祈っても手に入らないものへの道、

請い求められもしないもの。覚悟はできているか？—

鍵でも、門でも開くわけじゃない、

孤独、孤独と孤独に追い回される。

荒野とか孤独とかお前は分かっているのか？

「母たち」とはなんであろうか？ 異界とか冥界とか、「区切り」を表す「界」を使うことはできない。空間など「間」を使うこともできないであろう。「間」が一応、物と物との、或いは時と時との隔たりを示しているのなら、使用できない。エッカーマン（Johann Peter Eckermann）との対話などでギリシャのある作家のことから解釈されたり、自然観察でゲーテが抱いた「原植物」の概念などから解釈されることもある。しかしここでは、ゲーテの想念から生まれた独自の産物であるというぐらいにしておく。筆者もよく解からない。ただギリシャ神話からの影響はあるようだ。メフィストフェレスはこの「母たち」を「形態の解き放たれた国」（*der Gebilde losgebundene Reich*, 6277, S. 193）と呼んでおり、しっかりとあはしないが、一応、ここでは「国」と呼ぶことにする。

それでは、「母たち」とはどのような国であろうか？ メフィストフェレスの言葉を借りながら、想像してみよう。「女王たち（複数）」がそれぞれに君臨していて、その回りには場所（空間）も時間をない。そこは辿り着く道はなく、掘り進まねばならないのだが、そこには誰も踏み入れたことはないし、願っても請い求めても、それを得られるものではない。ただ荒涼とした空虚に、本当の孤独（どんなものであろうか？）に追い回される「国」である。「荒野」も、孤独にさいなまれた心の荒蕪な状態を示しているのであろう。さらにメフィストフェレスは言う。“Nichts wirst du sehn in ewig leerer Fernne, / Den Schritt nicht hören, den du tust, / Nichts Festes finden, wo du ruhst.” (6246-8, S. 192) 「永遠の遙かさのなかで、何ひとつ見るものもないでしょう、 / 踏み出す足音も聞こえない、 / 休みたくともしっかり

した身をあずけるものもない」。つまり、永遠の虚無だけで、なにも見えない、なにも聞こえない、何ひとつ掴むこともできない。その国に行くのに「降りていく」(versinken)でも「昇っていく」(steigen)でも、どのように表現しても同じだという。天上界や天国など想起できないし、冥界や地獄なども考えられない。「母たち」と、言葉だけで恐れを抱くファウストだが、そのなかで「万有」(das All)を見い出すと嘯き、“Doch im Erstarren such' ich nicht mein Heil, / Das Schaudern ist der Menschheit bestes Teil ;” (6271-2, S.193)「立ちすくむことに救いを求めはしない、/ 戦慄することこそ人間の最上の部分なのだ」と言って、その国に行くことを決意する。このような「知」への意思がファウストの行動を発起させる原動である。その国にあるのは「ずっと昔に存在をなくしたもの」(längst nicht mehr Vorhandnen)であり、「雲の流れ(複数)」(Wolkenzüge)のようになって群がっているらしい。そして、それに触れてしまってはならない。

メフィストはさらに続ける。

MEPH. Ein glühnder Dreifuß tut dir endlich kund,
Du seist im tiefsten allertiefsten Grund.
Bei seinem Schein wirst du die Mütter sehn,
Die einen sitzen, andre stehn und gehn,
Wie's eben kommt. Gestaltung, Umgestaltung,
Des ewigen Sinnes ewige Unterhaltung.
Umschwebt von Bildern aller Kreatur ;
Sie sehn dich nicht, denn Schemen sehn sie nur.
Da faß ein Herz, denn die Gefahr ist groß,
Und gehe grad' auf jenen Dreifuß los,
Berühr ihn mit dem Schlüssel! (6283-93, S. 193)

メフィスト. 最後には、赤熱する鼎があなたに知らせてくれます、
あなたが、深い深い、とてつもなく奥深い底にたどり着いたことを。
鼎の輝きであなたは母たちを見ることになる。
あるものは座り、別の者たちは立ったり歩いたりしている、
まさしくあるがままの姿で。形をつくり、形を変えて、
永遠の感覚の永遠の楽しみ。
すべての被造物の形象が周りに漂う。
母たちにはあなたが見えない、それらに見えるのは幻影だけです。
そのときは、勇気を奮い起こしなさい、非常に危険なのです。
まっすぐに鼎のほうに向かっていきなさい、
この鍵でそれに触れなさい！

行ったことがあるかのようにメフィストは説明している。「形象」とは呼ばれているが、それは「感覚」のふちで漂っているようなもので、その形象も「幻影」(Schemen)である。その形象を作り出し、また変形させている「母たち」も幻のようなものであろう。そして、崇拜の対象である鼎を鍵の牽引力でもって、この世に引き連れてくるのである。

時間も空間もなく、生命もなく、現実と隔絶した永遠の虚無の「国」にどうしてゲーテは、「母たち」という名称を与えてのであろう？ その音声を聞くだけで、ファウストも、悪魔であるメフィストさえも、恐怖の観念を抱く。若い頃、反抗期などに、その理不尽な扱いに「くそババー」とか「鬼ババー」とか、そんなふうに母親を呼んだこともある。また、十分に「母たち」と呼べるうる婦人たちが幾人か集まり、そのかまびすしい状況に、気付かれずそっとやり過ごそうとする老齢男性の恐怖にの似た思いも理解できる。しかし通常、「母」は最も身近な存在であらうし、父親に比して、「優しさ、慈しみ」の対象として表象されることが多い。ゲーテの母親に対する関係も、あまり問題にされることもない。生成とも関連するのであろうが、この命名に何か気にかかっているのである。もう50年以上前のことになるが、大学生の時に読んだ、アルベール・カミュ (Albert Camus) の『異邦人』の冒頭を思い浮かべた。それもなぜだろう。

ファウストの道行きがどのようなものであったのか、それは分からない。退屈な一場を経て、いかにも暇そうな皇帝や臣下の揃うなかに、ファウストが戻ってくる。パリとヘレナの形象が現れると、パリには女たちから、ヘレナには男たちから賛嘆の声が上がる。戯れであろうが、天文博士がパリを「英雄」に見たて、幻影の映ずる光景を「ヘレナの略奪」(Raub der Helena) と名付ける。するとファウストは、次のように言って、ヘレナを攫もうとし、パリに鍵をむける。

FAUST. Was Raub! Bin ich für nichts an dieser Stelle!
Ist dieser Schlüssel nicht in meiner Hand!
Er führte mich, durch Graus und Wog' und Welle
Der Einsamkeiten, her zum festen Strand.
Hier fass' ich Fuß! Hier sind es Wirklichkeiten,
Von hier aus darf der Geist mit Geistern streiten,
Das Doppelreich, das große, sich bereiten.
So fern sie war, wie kann sie näher sein!
Ich rette sie, und sie ist doppelt mein.
Gewagt! Ihr Mütter! Mütter! müßt's gewähren!
Wer sie erkennt, der darf sie nicht entbehren. (6549-59, S. 201)

ファウスト. なに、掠奪！ おれは、この場のこと、なにもかも不承知だ！
この鍵がまだおれの手にあるではないか！

この鍵がおれを、孤独の戦慄と波濤をぬけて
確固たる岸辺に導いてくれた。
ここにおれはしっかりと足をつけている！ ここにあるのが現実なのだ、
ここから精神が亡霊どもと戦い、
二重の王国、偉大な国を、造ってもいいであろう。
あんなに遠く離れていたヘレナが、なんと近くにいることであろう！
おれは彼女を救う、彼女は二重におれのものだ。
思い切ってやるのだ！ 母たち！ 母たち！ お与えくださるまし！
ヘレナを認めた者は、もう彼女なしでは済まされないのです。

ファウストは、この鍵に導かれ、何も無い孤独の極みのなかを行き、ことをなして、やっ
と確かな大地に足を踏みしめた。幻影の只中から現実の世界へと帰ってきたのである。「二
重の王国」を示す語が、'fern' と 'nah'（ここは比較級の 'näher'）である。「美」の理念とし
て移ろいゆく幻影、ここに現れた現実の形象、この二つの意義が、この場のヘレナに付され
ている。この 'fern' と 'nah' が近づき、かさなりあったとき、「二重の王国」は実現するの
である。ファウストは、強欲にも、同時にこの二つの意義を求めているのである。第三幕で、
メフィストフェレスが仮装するフォルキアス（Phorkyas）の脅かされたヘレナは、ファウ
ストに助けを求める。「城の中庭」（Innerer Burghof）の場で、ミンネの礼を尽くすファウ
ストと、優しく心に入り込むドイツ語で、韻律をかけあっていく。合一していく過程を表象
しているこの美しい場面の最後で、感極まって二人は次のように言う。

HELENA. Ich fühle mich so fern und doch so nah,
Und sage nur zu gern : Da bin ich ! da !
FAUST. Ich atme kaum, mir zittert, stockt das Wort ;
Es ist ein Traum, verschwunden Tag und Ort.
HELENA. Ich scheine mir verlobt und doch so neu,
In dich verwebt, dem Unbekannten treu.
FAUST. Durchgrüble nicht das einzigste Geschick !
Dasein ist Pflicht, und wär's ein Augenblick. (9411-18, S. 284)

ヘレナ. 遠く離れているような、でもすぐ近くにもいるように感じる。
ただもう「わたしはここにいる！ ここに！」と喜んで言えます。
ファウスト. 息ができない、震えています、言葉が詰まります。
夢なのでしょう、日付も場所も消えてしまう。
ヘレナ. わたしにはもう過ぎ去ったことのように、また新たなことのように思える。
見ず知らずのあなたに融けこみ、変らぬ誠をささげて。

ファウスト. ただ一度のめぐり合わせに、とやかく思い悩むことはない！
ここに居ること、それは義務だ、たとえ瞬間であろうとも。

ヘレナは自己に対して、「遠い」そして「近い」、また、その生が既に終わったような、新たに甦ってくるような、そのような感覚を抱いている。そして「美」の化身であろう自己が、現存（Dasein）していることを明確に宣言するのである。またファウストも、一瞬であろうと、‘Dasein’ が義務だと叫ぶ。この瞬間に、メフィストフェレスとの契約の言葉が発せられても不思議ではない。ゲルマンの「精神」がギリシャの「美」をもって形成、現出する瞬間にまで高揚している。ところが、間が空くこともなく、フォルキアスに扮装したメフィストフェレスが慌てて来て、メネラス（Menelas）の来襲を告げるのである。

「遠い」、「近い」という感傷は、ファウストとヘレナ、互いの‘Dasein’ 認識の根底にある。‘Dasein’ はハイデガー（Martin Heidegger）によって、実存主義を標榜する語彙となっている。

しかしこの場では、逃すまいと、ファウストはヘレナを掴もうとする。ヘレナが混濁していき、鍵がパリスに触れ、爆発が起こってファウストは倒れてしまう。ファウストを肩に担ぎながら、メフィストフェレスは、観客に向かって、ため息をつくかのように次のように言って、幕が下がる。

Da habt ihr's nun! Mit Narren sich beladen,
Das kommt zuletzt dem Teufel selbst zu Schaden. (6564-5, S. 201)

そう皆さん、もうお判りでしょう！ 馬鹿どもとかかわるとね、
結局のところ悪魔でさえワリを食ってしまうのだ。

たとえ身分や役職の高い方々であったとしても、「馬鹿ども」と係わりあわないほうが良いようである。

最後に、知恵者として認められたメフィストフェレスにいろいろな相談が寄せられる。そのひとつを取り上げてこの場は終わりにしたい。

夏になると、美しい顔に赤い斑点ができ、色白の肌を被ってしまう。それを治すための薬はないか、というブロンドの髪的女性からの相談である。

MEPHISTOPHELES. Schade! So ein leuchtend Schätzchen
Im Mai getupft wie eine Pantherkätzchen.
Nehmt Froschlaich, Krötenzungen, kohobiert,
Im vollsten Mondlicht sorglich destilliert,
Und, wenn er abnimmt, reinlich aufgestrichen,
Der Frühling kommt, die Tupfen sind entwichen. (6323-8, S. 194)

メフィストフェレス. なんということだ！ 輝くような可愛いお方が、
五月になればオセロットのようにブチになってしまうとは
カエルの卵とガマの舌を取ってきて、煮たて、
満月の光の下で念入りに蒸留し、
そして、月が欠けていくときに、きれいに塗ってください、
春が来たらブチも失せてしましましょう。

もし吹き出物などでお悩みの方々は、このメフィストフェレスの助言を参考にされること
をお勧めします。また、足のしもやけに悩んでいる方や、ほかの女性に色目を使う彼氏にい
きり立つ女性への忠告、好きでたまらない女性から、子供扱いされる若者への忠告。心当た
りのある方は、参照されるのも、よろしいかと。 (2020. 6. 15)

III. 「牢獄」 Notizen über “Faust”3 —‘Kerker’—

3. 牢獄

昨年（2019年）の4月15日の夜、パリのノートルダム大聖堂が火災炎上し、中央の尖塔が
崩落したというニュースが入ってきた。「まさか！」という驚きとともに、なぜか『ファウ
スト』第一部の最終の場「牢獄」が頭に浮かんできた。結論から言うと、この牢獄は、地獄
の業火に包まれた教会であり、その業火からマルガレーテを守ってくれている教会なのであ
る。炎上崩壊などあってはならないのだ。

以前、琉球新報の「晴読雨読」にも書いたのであるが、わたしは、リルケ（Rilke, Rainer
Maria）の『マルテの手記』（Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge）を高校三年
生のときの「現代国語」の教科書で知り、大山定一訳の新潮文庫で読み、この作品を原文で
読むためのドイツ文学を専攻することにした。この作品の舞台は、「死」が大量生産されて
いる近代の大都会パリである。

沖縄国際大学に赴任して二年目に初めて海外旅行をした。夏休みの大部分を割いたヨー
ロッパ旅行であった。当時わたしは、『新詩集』（Neue Gedichte）を研究対象にしていた。「も
のの詩」（Dinggedichte）と呼ばれている詩のなかに、パリの建造物や、またそれに付随し
ているものが、モチーフになっていた。それらを訪ねて、自分の目で見てみようと考えて
いたので、それらを記したメモを作っておいた。シンガポール経由の南回りで、フランクフ
ルトに行った。ハイデルベルク大学に留学していた先輩がいたので、まずはそこで五泊ぐら
いしたであろうか。初めての海外旅行で、切符の買い方も分からず、こちらの生活システム
に少しでも慣れる必要もあった。

そのあと、ひとりでハイデルベルクからパリ行きの列車に乗って、確か東駅に着いたかと思
う。それも午後であった。そこから大きな旅行ケースを押しながら、南下し、セヌ川を
越えて、サンミッシェルまで歩いた。途中、段ボールなどで手を隠し、金目の物を物色しよ

うとする子供たちに囲まれて往生した。ガイドブックで見当をつけていた安いホテルに行き、屋根裏の部屋に泊まることができた。一週間ほど滞在したかと思う。ホテルで荷を下ろし、身軽になってすぐに行ったのがセヌ川をはさんで見えているパリ大聖堂、ノートルダムであった。ヨーロッパの夏は、午後が長い。

ノートルダム大聖堂は盛期ゴシック様式のモニュメントともいえる。まさしく「神の家」なのである。大聖堂は通常、西側に面したファサードに三連の扉口を持ち、中央の扉口が大きい。そのタンパンや側柱などには「最後の審判」のレリーフで装飾されている場合が多く、ここもそうである。「ノートルダム」であるから、他の二つの一つは「マリアの生涯」である。この扉は、天国への入口であるといえよう。タンパンには大天使ミカエルの彫像が置かれ、秤をもって死者の罪の重さを計り、天国に送るか、地獄の落とすかを決めるのである。なにかの本で読んだのだが、イギリスの大司教の説教によると、一人天国に昇れば、千人が地獄の落とされるそうだ。現世の人間を恐怖に駆り立てることによって、宗教は成立しているのか。洋の東西を問わず、われわれは、なぜか地獄を生き生きと思い浮かべることができる。しかし、天国とか極楽浄土とかいわれて、具体的にはなにも想像できない。フオークルセダースの歌にあるように、「酒はうまいし、ねえちゃんはきれいだ」であればよいが、経典を読むだけの安逸な日々を送る、退屈なところのように思える。そう考えれば、地獄でもよさそうだ。

右か左かの扉口のその扉から中に入ると、天井があり、少し暗い。この上にはパイプオルガンが備え付けられていることが多い。そこから身廊を通して内陣や祭壇まで見ることができる。内陣の手前に南北をつなぐ翼廊（袖廊）がある。身廊と翼廊と内陣が交差する空間があり、十字架を示すとともに、その交差する中心に尖塔がそびえている。今回の火災でそれが完全に崩壊したとのことである。大聖堂には、晴れた日に行くべきで、スタンドグラスや薔薇窓を通して入る光は美しい。また、ノートルダム大聖堂は、本当に明るい。身廊を通過して祭壇に向かうだけで、天国に行けるような気になる。

一度、ミサが行われる日曜日に行ったことがある。ローマカトリックの信者でもある観光客も多く来ておられたのであろう。坐るところはすべてうまり、後方にも多くの人びとが立っておられた。前のほうでは礼拝が行われている。やがて、礼拝者にホスチアを配る儀式になった。多くの牧師さんが、なるべく多くの人びとに配るべく巡っておられた。「まさか！」と思ったが、わたしの前に来て、腕から一片のホスチアを差し出されたときは驚いて戸惑ってしまった。「ノン、メルシー！」などと言って、目で挨拶をすると、隣の人に移ってくれた。悪意はないのだが、礼を失したような心持で、天国に紛れ込んだ悪魔のような居心地の悪さを感じた。

西正面の塔には「シメールのギャラリー」と呼ばれているところがある。そこには鳥類や動物、小鬼など、怪物や化け物の彫像が並んでパリの街を見下ろしている。グロテスクな相貌でありながらユーモラスであり、恐怖を覚えるとともに友達になりたいような親しみを感じる。『新詩集』にもこれをモチーフにした詩篇があったと思う。また、教会の外壁を支

えるフライング・パットレスに掘られた溝を通り、雨水をなるべく遠くに排出するために伸ばされた排水口がある。ガーゴイルと呼ばれる。そこにも彫像が施されて、挑発するように、下に行く人びとを睨みつけている。これらは、装飾のためだけに取り付けられたわけではないだろう。教会の外は、魑魅魍魎が跋扈する世界であり、教会の内は、天使が飛び交い、安寧をもたらす世界であることを示している。芸術だ、などと意識することもなく、それらにも製作者たちの信仰が刻まれている。

最後にノートルダム大聖堂を見たのは、七年ほど前のことか。三月の、小雪が時折りちらつく寒い日であった。ツェラン (Celan, Paul) の足跡を追って、サンミッシェルの近くの小さな教会を訪ねた。そこを出て少し歩き、セーヌ川の橋ところから大聖堂を見た。行ってみようかなとも思ったが、朝から歩いて疲れ、寒くて少し暗くなったおり、また次にすることにした。

「牢獄」に戻ろう。

マルガレーテはどうして牢獄につながれることになったのか。マルガレーテは、貧しくとも日常的なささやかな幸福にすべてを捧げていた。ファウストを知り、彼への思慕が無垢な愛情となる。そして、ファウストとの間に子供が生まれ、その子を抱きながらさすらい、そのあげく子を池に投げ込んで殺してしまう。嬰兒殺しの死刑囚として牢獄につながれ、気も狂ってしまう。気が狂いながらも、神の恩寵を信じて、贖罪の気持ちを忘れずにいる。

一方ファウストは、グレートヒェンの兄で兵士のヴァレンティンを殺害してしまう。ほとぼりが冷めるまでと、メフィストに誘われてブロッケン山に行き、ワルプルギスの夜に酔いしれている。美女と踊っているときに、首筋から赤いひもをたらしめたグレートヒェンの亡霊を見る。自らの罪を知り、後悔にさいなまれたファウストは、やさしい可哀そうなその娘を救い出すために牢獄に向かうのである。

牢獄では、気がふれたグレートヒェンが、古民謡を歌っている。

Meine Mutter, die Hur',
Die mich umgebracht hat!
Mein Vater, der Schelm,
Der mich gessen hat!
Mein Schwesterlein klein
Hub auf die Bein',
An einem kühlen Ort ;
Da ward ich ein schönes Waldvögelein ;
Fliege fort, fliege fort. (4412-20, S. 139)

あばずれ女の、わたしの母さん、

わたしを処刑する権限を与えたの！
こんな真夜中にわたしを連れていくの。
憐れみを、生かしてくださいまし！
明日の朝でも、十分間に合うでしょう？

(彼女は立つ)

わたし、まだこんなにも若いのに、こんなにも若いのに！
もう、死ななければならぬ！
それにわたし、きれいだった、それがわたしをだめにした。
いとしい人がそばにいたのよ、いまでは遠く離れて。
花嫁の冠を引きちぎられ、花も散らばってしまった。
そんな乱暴にわたしをつかまさないで！
やさしくしてください！ わたしがあなたに何をしたというの？
わたしの願いをお聞きください、
でも、あなたとは今までお会いしたこともなかったのよ。

グレートヒェンの望みは、花嫁の冠をつけて、ささやかな家庭を営むことであったのか。気の触れたグレートヒェンは、まだ手元に我が子がいると思い、授乳し、抱いていようとす。この悲惨さから救うべく、ファウストがここに来ていることを告げるのだが、グレートヒェンには分からない。首切り役人だと思っているそのファウストに身を寄せて、ともに祈ることを求める。

MARGARETE wirft sich zu ihm.

O laß uns knien, die Heil'gen anzurufen!
Sieh! Unter diesen Stufen,
Unter der Schwelle
Siedet die Hölle!
Der Böse,
Mit furchtbarem Grimme,
Macht ein Getöse! (4453-59, S. 140)

マルガレーテ (彼に身をよせて)。

さあ、聖なる方々に頼み、膝まづきましょう！
ほら見て、階段の下も、
闘の下も
地獄が煮えたぎっています。
悪魔が、

恐ろしい形相で、
轟音を掻き立てています。

悲惨な状況に落とされ、気が触れたとしても、グレートヒェンは、信仰を失ってはいない。足元に地獄が煮えたぎっていることを認めている。グレートヒェンには、この牢獄が祈りの場であり、ここにいることが安らぎでもあるのだ。おそらく、ここから「救われる」ということの意味が、振幅をもちながらも、意識されることもなく、グレートヒェンの内で、変容していくのであろう。

「悪魔」(Der Böse)は形容詞「悪い」(böse)の男性名詞化で、定冠詞を付した単数である。男性名詞化すると、「悪い男」ということだが、「悪魔」という意味もある。悪魔だらけだと思ふのだが、辞書によれば、女性名詞化されると「悪い女」ということで、「悪魔」という意味はないようだ。手塚治虫氏は、ゲーテの『ファウスト』を取り上げて、二度作品にしている。自身の死によって未完になったが、二度目の作品では、メフィストをスマートな色っぽい美しい女性にしている。もちろん、ヤキモチやきで、ヒステリーの意地悪女でもある。第二部まで構想はねられていたらしいが、第一部の終局までもできていない。メフィストは男性だという先入観を持っていたので、この「悪魔」が、それぞれの場面で、どのように変貌していくのか、気になるところであった。残念である。その他にも、『ネオ・ファウスト』という作品もある。

メフィストフェレスは、この「牢獄」の場面ではほとんど出てこない。終わりのほうで、救出に来たのに、なかなか出てこない二人に、辛抱しきれずに呼び掛ける。

MEPHISTOPHELES erscheint draußen. Auf! oder ihr seid verloren.

Unnützes Zagen! Zaudern und Plaudern!

Meine Pferde schaudern,

Der Morgen dämmt auf.

MARGARETE. Was steigt aus dem Boden herauf?

Der! der! Schick' ihn fort!

Was will der an dem heiligen Ort?

Er will mich. (4597-4604, S. 144)

メフィストフェレス (外に現れる). 早く! さもないとお前さんら破滅だぞ!

臆するなど無駄だ! ためらうな、無駄口ばかり!

馬どもが身を震わせわなないていますぜ、

夜がもう明けてきた。

マルガレーテ. なにが地の底から湧き上がってきたの?

あの人です! あの人だ! 追い出して!

あの人、この聖なる場所で何を求めているのです？
わたしをだ！

本来地獄の属しているであろうメフィストフェレスは、この牢獄の中に入りことはできない。闘のところから声をかけるしかない。牢獄であるが、そこは、グレートヒェンの敬虔な信仰の力によって神の裁きを受ける神聖な場に変容している。メフィストフェレスはこの場所に介入することはできない。外で待つ、メフィストフェレスが連れてきた馬たちは魔法の馬であり、無明の夜の実在のない形姿で、夜が明けると消えてしまう。この馬たちのわななきは、救出が不可能になったことを暗示するのであろう。

このメフィストフェレスの姿を見て、グレートヒェンは、神の裁きを、その救済を求めるのである。

MARGARETE. Gericht Gottes! dir hab' ich mich übergeben!

MEPHISTOPHELES zu Faust.

Komm! komm! Ich lasse dich mit ihr im Stich.

MARGARETE. Dein bin ich, Vater! Rette mich!

Ihr Engel! Ihr heiligen Scharen,

Lagert euch umher, mich zu bewahren!

Heinrich! Mir graut's vor dir.

MEPHISTOPHELES. Sie ist gerichtet!

STIMME von oben. Ist gerettet!

MEPHISTOPHELES zu Faust. Her zu mir!

Verswindet mit Faust.

STIMME von innen, verhallend. Heinrich! Heinrich! (4605-12, S. 145)

マルガレーテ. 神さま、お裁きを！ あなたにこの身をお任せいたしました！

メフィストフェレス（ファウストに）

来い！ 来いよ！ おまえもその女とともに捨てていくぞ。

マルガレーテ. わたしはあなたのものです、神さま！ お救いください！

あなたがた、天使さま！ あなた方の聖なる群れが

周りにとどまり、わたしをお守りくださいませ！

ハインリヒ！ わたし、あなたが恐ろしい！

メフィストフェレス. この女は、裁かれた。

声（上から）. 救われた！

メフィストフェレス（ファウストに） さあ、こちらへ！

（ファウストとともに姿を消す）

声（中から、次第に弱まって消えていく）、 ハインリヒ！ ハインリヒ！

ここで、第一部が終結する。最後の「声」は、多分、グレートヒェンが去っていくファウストに呼び掛けているのであろう。この呼びかけが、二度ならず、幾度にも反響して聞こえてくるようだ。グレートヒェンは、敬虔な気持ちで、神の裁きに身を委ねている。天使たちの姿も見えているようだ。その時に、この牢獄から救い出しに来たファウストに「恐ろしい」という。最愛の男性といえ、悪魔と結託している姿を見たからであろう。母親殺し、嬰兒殺し、それらの罪を鑑みて、メフィストフェレスは「裁かれた」という。すると、上からの「声」が「救われた」と応じる。この魂の救済は、自己の罪を認めて、無私のまま、穢れのない純粹な信仰によって、その裁定を神に委ねたからであろう。この牢獄のなかで、変容していくグレートヒェンの姿を見てみたい。

「ハインリヒ」という名は、ファウストの「前の名」(Vorname)である。15世紀から16世紀にかけて実在したというファウストの名は「ヨハン」(Johann)と伝わっている。「ゲオルゲ」(George)だという伝えもある。ゲーテは、どうして「ハインリヒ」という名前をあたえたのであろう。最初に出てくるのは「マルテの庭」(Marthens Garten)で、マルガレーテのファウストへの呼び掛けに使われている。(3414, S. 109)「ヨハン」はゲーテ自身の名でもあり、それを避けるためであったのか、よく判らない。1771年8月にゲーテは、法律修業士の資格を得て、フランクフルトに戻り、弁護士を開業している。10月に、グレートヒェン・モティーフのモデルになったといわれている嬰兒殺しの女、スザンナ・マルガレーテ・ブ란ツの裁判があり、死刑判決を受ける。ゲーテはこの裁判を傍聴していた。翌年の1月に、ゲーテの住居の近くの広場で公開処刑が行われた。その時の処刑執行人の名前が、ハインリヒ・ホフマンであった。ゲーテがそこから借用して、ファウストの「前の名」につけるであろうか。ゲーテ自身、そのことについて何も言っていないようだが、わたしには考えられない。ただ、'Heinrich'は音韻上、「強・弱」とならんでおり、特に最後の場面では響きながら消えていくのに、効果的な音の配列のようである。

前に戻ってみよう。

気が触れているグレートヒェンも、ファウストの強い呼びかけで、それが、最愛の人であることが判る。

MARGARETE. Du bist's! O sag' es noch einmal!

 Ihn fassend.

Er ist's! Er ist's! Wohin ist alle Qual?

Wohin die Angst des Kerkers? der Ketten?

Du bist's! Kommst, mich zu retten!

Ich bin gerettet! —

(4470-74, S. 141)

わたくしの子をわたしは水に沈めました。
その子はあなたとわたしに授かったもの。
あなたの子よ。あなたなのね！わたし、あなただなんて信じられない。
あなたの手を！ 夢じゃない！
あなたのいとおいしい手！ あ、でもこの手、湿っている！
手をぬぐって！ わたしには
そこに血がついているみたいに思えるの。
まあ大変！ あなた何をなされたの！
剣を納めてください！
お願い！

救出にきたファウストに「あなただ」とまたもや確かめている。握りしめたファウストの手には、おそらく「血」はついていないであろう。この時、ファウストが佩剣していたとして、腰の帯びるその剣が兄殺害の剣であるとしても、ここでは抜かれていないであろう。グレートヒェンは、自分の罪と共にファウストの罪認めようとしているのか。狂気（気が触れた状態）から正気、正気から狂気へと、感情的な葛藤が制御できずに興奮がむき出しになっている。

外に連れ出そうとするファウストに、行きたいと思いながらも、グレートヒェンを行けなくしているのは、「悪い良心（良心の呵責）」（mit bösen Gewissen, 4547, S. 143）が関わっているからである。自分が殺めてしまった我が子と母親にたいしての呵責である。

MARGARETE. Geschwind! Geschwind!
Rette dein armes Kind.
Fort! Immer den Weg
Am Bach hinauf,
Über den Steg,
In den Wald hinein,
Links, wo die Planke steht,
Im Teich,
Faß es nur gleich!
Es will sich heben,
Es zappelt noch!
Rette! rette!

FAUST. Besinne dich doch!
Nur **einen** Schritt, so bist du frei!

MARGARETE. Wären wir nur den Berg vorbei!

Da sitzt meine Mutter auf einem Stein,
Es faßt mich kalt beim Schopfe!
Da sitzt meine Mutter auf einem Stein
Und wackelt mit dem Kopfe ;
Sie winkt nicht, sie nickt nicht, der Kopf ist ihr schwer,
Sie schlief so lange, sie wacht nicht mehr,
Sie schlief, damit wir uns freuten.
Es waren glückliche Zeiten! (4551-73, S. 143-4)

マルガレーテ. 早く！ 早く！
あなたの可哀想な赤ちゃんを助けて！
先を行って！ この道をそのまま
小川に沿って上のほうへ、
小橋を渡って、
森に入って、
左側、渡り板のあるところ、
池の中に、
すぐにその子をつかまえて！
浮き上ろうとしている、
まだ手足を動かしている！
助けて！ 助けて！

ファウスト. 正気になってくれ！
ただ一歩踏み出せばいい、そうすれば、おまえは自由になる！

マルガレーテ. その山を通り越してしまえば！
あそこで、わたしの母さんが石に座っている。
わたしの髪の毛に寒気がはしる。
あそこで、わたしの母さんが石に座っている、
そして頭を揺らしている。
目くばせもせず、うなずきもせず、母さんの頭、重いみたい。
母さん、ずっと眠っていた、もう目が覚めない、
母さん、眠っていた、それでわたしたち逢瀬を楽しんだ。
幸せなときだった。

幻覚でも見ているのか。気が触れているように見えるのに、なにか落ち着きさえ感じさせる。グレートヒェンの脳裏に去来するのは、死なせた子供と母親のことばかり。それをファウストに打ち明けながら、神を前にして懺悔をしているような雰囲気さえもある。

そして、この処刑の日、それは「婚礼の日」になるはずであった。まるで懺悔を終えて、神の前に膝まづくグレートヒェンには、神の裁きを受ける用意が整ったのである。(2020. 8. 18)

IV. ペスト Notizen über “Faust”4 — Pest —

4. ペスト

現在、「チャイニーズウイルス」ともいわれている「新型コロナウイルス」(COVID-19)による新たな感染症に世界は蹂躪され、世界的大流行、パンデミックが起こっている。現在(9月19日)、世界の累計患者数30,369,778人で、死亡者数は948,795人となっている。(hazarad.yahoo.co.jpによる)死亡者も今月中に100万人をこえるのではなかろうか。今の流行は、第二波ともいわれている。この二ヶ月ほど、増加しているとも思えないが、高止まりで、感染者数からいって、第一波以上の猛威を振るっているように思える。これが落ち着いても、また第三波が来るらしい。

このウイルスに感染しても無症状で、そのまま通常の生活を営むことも多いらしい。その方々が、知らないままに他の人々に感染させるということが、各地でクラスターを発生させている。それらの大部分は、感染経路も判らず、感染者の急激な増加を引き起こしている。そうであれば、感染していないと確信しているわたしであっても、判らないということになりそうだ。

また、検査してみて、「偽陰性」(感染しているのに症状が出ていない)とか、「偽陽性」(感染していないのに症状が出ている。別の要因なのか?)とか、検査のたびに「陽性」の人が「陰性」になり、また「陽性」になるとか。なんとも厄介なウイルスだ。このウイルス自体も、自己の生存のために変異を重ねているらしい。感染した母体が死亡してしまうと、ウイルス自体の生存も危うくなるのであろう。できることなら根絶してほしいのだが、折り合いをつけ、ともに生存していく道を探求しなければならないようだ。

今のところ、このウイルスに効く薬もワクチンをない。世界中で開発途中で、いろいろな情報が出てきては消えていく。この競争には、なにかお金の臭いがプンプンしてくる。世界中の貧しい人々に無償で提供してくれるような医薬品メーカー、医学者に開発、製品化してもらいたい。緒方洪庵のような医者が、世界中で輩出されることを願っている。感染症は、一部の人だけ治癒できたとしても意味がない。また、感染していなくとも、その脅威にさらされ続けることになる。個人の問題というわけではなく、公共の問題ということになろう。また、人間の命が、金によって、救われるか、見捨てられるかが決まるのではやりきれない。。

第一波の只中であつた頃、アルベール・カミュの『ペスト』(新潮文庫)がよく売れたそうである。50年以上昔のことになるが、大学生のときに読んだ。大学院生のころに、新潮社から全集が出版されて、それを購入していた。今回それで『ペスト』を読んでみた。50年前にも思ったことなのだが、語り手である医者は、またその関係者たちは、このペスト感染に対して、なにか有効なことでもできたのか、ということである。このペスト感染は、自然の

摂理のように思えてならない。だが、人間は、それに対して何もしないわけにはいかないようだ。

ごく普通の日常の生活が営まれているアルジェリアの一つの港町に、突如、ネズミの大群が見受けられるようになる。それが繰り返して起こるようになり、範囲も広がっていく。そして感染者が出る。感染が広がり、死者が出る。町はロックダウンされて、ペストが猖獗を極めるなか、右往左往する人間の姿や街の様子が描かれていく。どれぐらい経った頃にだろうか、多くの死者と被害を出しながらも、ペストは収束に向かっていく。このペスト感染そのものは、静かに始まり、静かに収まっていく。

元氣な司祭が、ミサの時、信者を前にして、これは「神が与えられた試練だ」と説く。強い信仰心をもってこの試練に耐えていくことを訴える。しかし、時間の経過とともに司祭は元気をなくしていくのである。カミュは確か、「無神論者」であったと思う。「神の試練」とは？「生死」を問う人間の根源に襲い掛かる苦痛、苦難が、それだとするのなら、どうしてこれほどまでに、神は人間を幾重にも試そうとなさるのであるだろうか？ ツェランは、信仰する人間があればこそ神は存在するのであり、人間に対して祈れ、と神に命じる。これはもう、絶望を体験した人間の叫びであり、言葉が言葉でなくなる臨界を示すものであろう。この司祭も神への言葉を失っていくのだ。

日本にも、市中に疫病が蔓延し、路上に黒ずんだ死体や病人が横たわる絵巻物などがある。疫病の発生を、現世に恨みを抱きながら死んでいった者の霊の祟りだとする御霊信仰が全国にある。社寺を造営し、その怨霊をしずめる儀式、あるいは、加持祈禱によってそれを祓う儀式、などが現在でも行われている。古い古い時代のことだが、疫病に感染した地域や村落を封鎖し、焼き払って消滅させたという記録もあるらしい。医療技術の発達した現代であればこそ、少しは方策もありそうだが、ただ収束を願って、神仏にすがるしかない時代もあったのだ。現代でも、三密を避けるとか、マスクをする、手を洗う、うがいをする、清潔を保つことで、感染を防ぐしかない。そうして、ただ静かに収束を待つ、ということのようだ。

ファウストはどうかというと、いろいろな肩書があるが、医療従事者でもある。若いころにペストが猛威をふるい、父親とともにその治療にあっていた。

ファウストは、あらゆる学問を研究したが、なにも知ることはできないと嘆く。そして、魔法の書を開いて地霊を呼び出すのだが、その姿に恐れをなしたファウストを地霊は蔑み、姿を消す。知識にも魔法にも失望したファウストは、人間としてもはや、自己の意思を遂げることが不可能と悟り、毒杯をあおろうとする。その瞬間に教会の鐘が復活祭を告げる。鐘の深い響きとともに天使の清らかな歌声が、信仰心のないファウストにも、新しい世界の到来を告げ、若い生命の蘇りを感じさせるのである。

復活祭の午後、助手のヴァグナー（Wagner）を伴って「門の前」（VOR DEM TOR）に散歩に出る。老若男女、歌ったり踊ったり、飲んだり食ったり、賑わいをみせている。農夫たちが菩提樹の下で、踊り歌っているところに来たファウストに老農夫が声をかける。

ALTER BAUER. Herr Doktor, das ist schön von Euch,
Daß Ihr uns heute nicht verschmäht
Und unter dieses Volksgedräng',
Als ein so Hochgelahrter, geht.
So nehmet auch den schönsten Krug,
Den wir mit frischem Trunk gefüllt,
Ich bring' ihn zu und wünsche laut,
Daß er nicht nur den Drust Euch stillt :
Die Zahl der Tropfen, die er hegt,
Sei Euren Tagen zugelegt. (981-90, S. 37)

老農夫. 先生さま、まことにありがたいことでございます、
あなた様が今日、わたしたちをさげすむこともなく、
このような人のごったがやしているところに、
博識の先生さまとして、よくお出ましくございました。
さあ、いちばん良いジョッキをお取りください、
開けたての酒で満たしてございます。
わたくしめが一献差し上げ、ご健康を願います、
この酒がただあなた様の渴きを癒すだけでなく、
この酒が含みます滴の数ほどに、
ご長寿なさいますように。

それを受けてファウストは、祝福と感謝をもって乾杯するのである。人々はファウストの
周りに来て、取り囲む。そして、この老農夫は、かつてペストが蔓延した頃のことを回想す
るのである。

ALTER BAUER. Fürwahr, es ist sehr wohl getan,
Daß Ihr am frohen Tag erscheint ;
Habt Ihr es vormals doch mit uns
An bösen Tagen gut gemeint !
Gar mancher steht lebendig hier,
Den Euer Vater noch zuletzt
Der heißen Fieberwut entriß,
Als er der Seuche Ziel gesetzt.
Auch damals Ihr, ein junger Mann,
Ihr gingt in jedes Krankenhaus ;

Gar manche Leiche trug man fort,
Ihr aber kamt gesund heraus ;
Bestandet manche harte Proben ;
Dem Helfer half der Helfer droben. (993-1006, S. 37-8)

老農夫. まこと、うれしゅうございます、
この喜ばしき日に、あなた様が姿をお見せくださいます。
あなた様は以前、疫病がはやった日々に
わたしたちに善くしてくださいました。
あなた様のお父さまが、ついには、
この疫病を終わらせられましたとき、
燃えるような怒り狂う熱から救い出してくれました
多くの者たちがここに達者にしております。
当時お若かったあなた様も、
ひとり一人の患者の家を回っておられました。
本当に多くの死骸が運び出されました。
しかしあなた様は、何もなくてこられました。
あなた様は多くの厳しい試練も乗り切られた。
人助けする方に、天上の人助けする方が、手を差し伸べられた。

若いファウストは、感染する危険も顧みず、患者たちの家や施設を巡り、治療に従事していたのである。治療を受けて回復するよりも、死体になって運び出されることのほうが多かった。そして、感染することもなく、元気なままで出てくるファウスト。そこに、若いファウストは、何らかのわだかまりを抱いていたのかもしれない。その治療法とはどのようなものであったのか？

取り囲んでいる人々からも、感謝の言葉が唱和される。それに応えるファウストだが、この人々と共に踊ることはできない。尊敬され、賛美されたとしても、それが自分をさいなむ世辞として聞こえてくる。ファウストに一抹の淋しささえも感じさせる。日常の幸せな生活を営むこの人々と喜びを共にすることを、願いながらも、できないているのだ。通りすがりの人々からも敬意や謝意の挨拶を受けるファウストを、助手のワグナーは羨ましく思っている。そのようなワグナーにファウストは、自分の生い立ちのこと、パストのことなどを話す。長くなるのだが、引用する。そこに、錬金術などの様相がみえてくるであろう。

FAUST. Nur wenig Schritte noch hinauf zu jenem Stein,
Hier wollen wir von unserer Wandrunge rasten.
Hier saß ich oft gedankenvoll allein

Und quälte mich mit Beten und mit Fasten.
An Hoffnung reich, im Glauben fest,
Mit Tränen, Seufzen, Händeringen
Dacht' ich das Ende jener Pest
Vom Herrn des Himmels zu erzwingen.
Der Menge Beifall tönt mir nun wie Hohn.
O könntest du in meinem Innern lesen,
Wie wenig Vater und Sohn
Solch eines Ruhmes wert gewesen !
Mein Vater war ein dunkler Ehrenmann,
Der über die Natur und ihre heil'gen Kreise
In Redlichkeit, jedoch auf seine Weise,
Mit grillenhafter Mühe sann ;
Der, in Gesellschaft von Adepten,
Sich in die schwarze Küche schloß
Und, nach unendlichen Rezepten,
Das Widrige zusammengoß.
Da ward ein roter Leu, ein kühner Freier,
Im lauen Bad der Lilie vermählt,
Und beide dann mit offnem Flammenfeuer
Aus einem Brautgemach ins andere gequält.
Erschien darauf mit bunten Farben
Die junge Königin im Glas,
Hier war die Arznei, die Patienten starben,
Und niemand fragte : wer genas ?
So haben wir mit höllischen Latwergen
In diesen Tälern, diesen Bergen
Weit schlimmer als die Pest getobt.
Ich habe selbst den Gift an Tausende gegeben,
Sie welkten hin, ich muß erleben,
Daß man die frechen Mörder lobt. (1011-55, S.38-9)

ファウスト. もう数歩、あの石のところに上っていきましようか、
ここで、散歩も一息入れましよう。
ここでわしは、いつも一人で、あれこれ思いながら坐っていたよ。
祈りをし、断食もして、わが身を責めたてていた。

希望にあふれ、信仰も固く。
涙を流し、ため息をつき、悲嘆に手をよじりながら、
わしは、あのペストが終わることを
天にいます主から無理にでも得たいと考えた。
多くの人々の喝采が、わしにはあざけりのように聞こえてくる。
おお、君にはわしの心の内を読めないだろう、
父も息子のわたしも、
そんな称賛に値する人間ではない！
わしの父親は、怪しげのこともしたが誠実な男だった。
自然とその神聖な領域について、
実直に、でも自分のやり方で、
気まぐれにいろいろ考えこんで、無駄なことをしていた。
父親は、錬金術師たちの仲間に入っていて、
黒い厨にとじこもり、
そして、限りなくある処方箋を見て、
反対のものをかけ合わせていた。
すると、厚かましく結婚を求める赤い獅子が、
なまぬるい湯の中で百合とめあわせられ、
双方はそれから、むき出しの炎をかざして、
閨房から閨房へと迫っていった。
そのあと、とりどりの色は放ちながら
グラスの中に若い女王が現れた、
これは薬物だった、患者たちは死んでいった。
そして、誰も、治った者は？ と問う者もない。
それでわたしたちは地獄の舐薬をもって
谷あいの村々や山の村々に
ペスト以上にすさまじい害を及ぼしてしまった。
わし自身もその毒を数千人の人に処方した。
その人たちは次第に生気を失い死んでいった、それなのにわしは
この恥知らずの殺人者が褒められることを、身をもって知らしめられている。

老農夫やそのほかの人々から感謝や賞賛の言葉を受けても、ファウストには「あざけり」の言葉に聞こえる。この老農夫とファウストは、同一の過去の事象について述べているはずである。二人の言葉に関連し、対応しているところを見ていこう。細菌とかウイルスとか原因も分らず、抗する術もなく、悪性の疫病に対峙していた当時の医療事情（？）が少しは見えてくるかもしれない。

老農夫は、ファウストの父親が疫病を終わらせたという。それは、父親が作り出した「若い女王」という薬剤のおかげだともっているようだ。しかしファウストは、それを使うと患者たちは死んでいき、もっと悲惨な状況になったという。快癒した者のことなど尋ねられることもなく、死んでいくことが常態であった。ファウストは、その薬を「毒」(Gift)という。地域の村落を巡って「数千人」(Tausende)という多くの感染者にこの薬を処方し、そして、殺してしまった。悔悟の念を今も胸の内に認め、自己を「殺人者」だという。

14世紀から15世紀にかけてアジア、ヨーロッパを席卷したペスト(黒死病)の史上最大のパンデミックでは、ドイツの人口が三分の一に減少したともいわれている。ファウストが生存していたといわれる時代はその100年以上後にはなるが、その時代にも疫病が流行った時期もあったであろう、あるいは、この史上最大のパンデミックも考えて書かれているのかもしれない。また、大航海時代が到来し、新大陸も発見されて、積極的な海外進出の時代でもあった。抗体を持ったヨーロッパの野蛮人が新大陸に感染症をまき散らした時代でもある。感染症は、大きな文明さえも消滅させた。ヨーロッパでは、人口の減少で、食糧事情に余裕ができ、新世界や大航海などで新しい産物を得たりして、農業方式の変革や食事様式の変容をもたらした、と「食事」に関する本で読んだことがある。中世から近世・近代へと移り変わっていく節目でもあり、ルネサンスや宗教改革を準備することにつながっていく時代でもあった。

ファウストは、感染者に「毒」を処方したという。わたしも、抗癌剤を二年間飲んだ。おそらく最も弱い抗癌剤であろうが、説明書を読んでも、ほとんどの臓器に副作用を及ぼす。癌細胞を死滅させる効用があっても、正常な細胞をも死滅させるということだ。ハブの毒も抗癌剤になる可能性もあるらしい。治癒される患者の体力や免疫力などに相違はあろうが、薬になるか、毒になるかはその使い方による。薬とはそのようなものらしい。現在のよう、臨床治験で安全性を確保するというようなことも、当時はなかったであろう。まこと毒物らしい名称の「若い女王」という薬で、若いファウストは多くの人々を死へと追いやったのであろうが、それによって助かった人々もいたと考えられる。老農夫は、ファウストの父親のことを挙げて、治癒されて元気になった連中がここにいる、ことを告げている。若いファウストも、偶然かもしれないが、幾人かの人々を救っているかもしれない。現在では、簡単に「ロックダウン」などという言葉が口に出されるが、村落がロックダウンされるということは、当時なら、なにを意味していたであろう。凄まじいただならぬ様相を呈していたであろうことが、すぐに思い浮かべられる。ことの善悪を考えなければ、感染者が死んでいくことは、それだけ感染源が減少することにもつながる。ただ埋葬するだけが対処法であった時代に、多くの感染者が死ぬことが、収束に向かうように考えられたこともあったのではないだろうか。「希望にあふれ信仰も厚い」医療従事者の若いファウストは、ペスト感染の惨状を目の当たりにして、自分を責め、天上の主による救出を願うばかりであった。若いファウストのできることは、祈ること、断食をすること、涙を流すこと、ため息をつくこと、無力感に苛まれている姿が見えてくる。なにも出来ないと覚えながら、なにかをしなければ

ならないという空回りの気持ちだけがあった。

現在のコロナウィルスの場合はどうなのであろう。まだワクチンも血清も、予防薬も治療薬もできていない。今までの感染症に効用をみせた薬剤はすべて、世界中で試されたようだ。だが、不確定な情報ばかりで、すぐに消えていく。確立した治療法もなく、感染者と向かい合い続けなければならない医療関係者の大変なご苦勞をわたしたちは分かっていない。医療技術も発達し、社会制度も整い、社会環境が大きく改善された現代にあっても、若いファウストのように、治療に励みながら、自然の治癒力での回復をただ祈るしかないようなこともあるだろう。わたしたちもただ、イラつくこともなくおおらかに、感染予防に努めるしかない。それが収束に向かわせる最大の手当てなのだ。アマビエのお守りを肌身離さず、万の神々に祈り、特に、薬師如来さまのご加護をたまわられるように暮らしていく、それがわたしたちにできることだ。新聞（沖縄タイムス、9月17日付）によると、世界中で、コロナウィルスによって多くの看護師がなくなられた、と報道されている。疲労困憊であっても、さらに夜を徹して治療看護にあたられることもあろう。唯々、関係者の健康を祈るばかりだ。

薬剤「若い女王」を造ったファウストの父親は錬金術師であった。ファウストは、父親のことを「怪しげなこともしたが、誠実な男」（ein dunkler Ehrenmann）と言っている。「黒い厨」（die schwarze Küche）は錬金術師の実験室を示す常套語である。そこで、様々な物質を、特に、逆の反応を起こす化学物質と掛け合わせる。このような化学合成のやり方は、現代でも変わっていないであろう。ここでは「赤い獅子」（ein roter Leu）と「百合」（Lilie）という物質を掛け合わせている。どのような化学物質であるのかは分からない。原書の注にも明記されていない。手塚富雄氏は、訳注で、「おそらく」ではあるが、酸化水銀（赤色）と塩酸（白色）としている。また、「閨房」（Brautgemach）はレトルトであり、化学実験装置である。それも幾つかあり、管で繋がれているようだ。16世紀から17世紀の錬金術では、標章や紋章のようなものも混じり合った寓意画（Emblematik）でもって化学物質や合成過程などが表現されていた。ゲーテはそれをここで用いている。現代でも、このような寓意画のカードを用いて、怪しげな占いをする連中もいるようだ。この箇所は、第二部の第二幕「実験室」（Laboratorium）の、偉い先生になったワグナーが人造人間ホームクルス（Homunculus）を製造する場につながっていく。

この場では、弟子のワグナーは、ファウストが先人の技術を受け継ぎ、さらに高めていったことを称賛する。ファウストは、「まさに必要とすることは分からず、分かっていることは必要としない」（Was man nicht weiß, das eben brauchte man, / Und was man weiß, kann man nicht brauchen）（1066-7, S. 39）という。本当に必要とすることは分からないのである。結局のところ、自然の摂理に対して人間は無力であることを認めていることになる。今回のコロナウィルスの場合も、既知のことは役に立たず、未知の領域に入り必要なことを知ろうとしている。たとえ、ワクチンや血清が造られたとしても、そこからも新たな問題が起こってくるであろう。このあとの老いたファウストの台詞は美しい。夕焼けを目の前

にして、自然の原動を知るべく「精神の翼」(des Geistes Flügeln) が羽ばたくのだが、「体の翼」körperlicher Flügel) がそれに伴うことはない、という。しかし、老いてもなお、気持ちだけは高ぶっていくようだ。そういうとき、陥穽にはまることがある。今回も、収束に向けて早急な対策を講ずる必要があることは理解できる。しかし、ワクチン開発競争の高ぶりのなかで、現実はいかばかりであろうか。「若い女王」と同様、薬害などの将来に禍根が残るようなことにならないように願っている。

(2020. 9. 20)